

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

リハビリ中

第1回

重信房子



「53年ぶりの大衆集会」

篠田編集長から『創』に連載してみないかと夏に誘われました。

篠田編集長は、獄から出所した私がスマホと格闘したり新しい現実はどう対応しているのか、日常生活でいいから『創』に何回か連載して欲しいとの誘いです。『創』の中にそんなページがあってもいいかとも思いましたが、引き受けることにしました。でも体調を崩したまま回復できないので、秋から書くことにしました。

出所後、9月に大腸がんの手術

獄から5月28日に出所して以来、多くのことがあり過ぎて、まだ新しい世界に対応できていません。特に健康面で立ち遅れていました。私は出所後から療養を余儀なくされ、獄中で様々に支えて下さった友人たちに会って御礼もできず、義理を欠いた時間を過ごしました。この場を借りて非礼をお詫びします。その後、

9月にやっと体調を整えることができ、獄中にいた時から懸案だった大腸がんの内視鏡手術を終えました。獄では約2センチ以上の腫瘍は開腹手術を行うしかないのですが、出所後に内視鏡手術で済ませられないかと考え、専門技術のある施設での手術を望んできました。医師からは手術が可能なようまず体調を整えるよう言われて手術に向けた準備期間が長引いていました。

手術後の10月中旬に、病院より採取した生体の検査の結果が出て、がんはまだ深部に至っておらず今回でがんを取りきったので、開腹手術の必要がないとの知らせを受けました。やっとがんから当面解放されほっとしました。これまで獄で9回、今回含めると大腸、小腸、子宮など10カ所のがんをとりました。

私とがんとの付き合いは長く、また私の肉体もかなりしぶといようで、自分でも驚いています。私は「がん体質」であるとして、医師らが常に最善を尽くして下さったこと、みんなの協力支援で生き延びたと改めて思います。でも何度もの

発の誓いの日のように思えました。

その日はまた、明大土曜会の集まりがあり少し遅れて参加しました。「土曜会」は私の最高裁までの裁判を精神的にも財政的にも支えてくれた明大時代の友人たちによる救援仲間の組織でした。裁判が終わり、その集いを発展的に「明大土曜会」として再編してきました。この明大土曜会は、明治大学の枠を取っ払い、社会政治問題を学習分析しながら日本の社会をより良く変える場として特に3・11以降機能しています。それぞれが自分の持ち場で様々な問題にかかわりあい相互支援しているボランティアの自由で自発的な集まりです。この日は主に前田和男さんの基調報告による参議院選挙総括でした。私も挨拶しつつ参加しました。

10月16日には京都での集会に参加しました。「第16回 反戦・反貧困・反差別共同行動IN京都 変えよう! 日本と世界」という、毎年円山野外音楽堂で行われている集会です。この集会が始まった16年前の言いだしっぺは、関西で私の獄中公判救援活動をして下さっていた

手術による腸の機能劣化で腸閉塞を繰り返しており、今後も療養しつつ生活していくつもりです。この連載のタイトルは、手術がうまくいったら「リハビリ日記」に、うまくいかなかったら「残日録」にしようと考えていました。そんな訳でこの連載は「リハビリ日記」(正式名称は「ただいまリハビリ中」と呼ぶことになりました。

10月16日、京都での集会に参加

療養中、メールや電話のやり取りはし



10月16日、京都での集会で

ていましたが、外出して人と会うことは控えてきました。9月下旬に病院を退院する見通しも立ったので、10月からいくつか予定を入れました。まず、10月1日に上野入谷にある法昌寺を訪問し、短歌「月光の会」の創設者である福島先生にお会いしました。福島先生は法昌寺の住職でもあります。私の歌集『暁の星』は福島先生と月光の会の方々の努力によって5月27日、出所に合わせて出版されました。その件でまずお礼を伝えるためです。予想していなかったことですが、法昌寺に着くと福島先生が法要を準備して待

っていてくださり、亡くなった

私の家族と、戦

いで殉教した私

の親友たちの法

要を丁寧に行っ

てくださいまし

た。私は初めて

法要というもの

に参加し、死者と語り合い再出

「さわさわ」(「さわ」、または「さわさわ」)は、アラビア語で「一緒に」の意味)の友人たちでもあり、獄にいたときから、出所後の秋に円山野外音楽堂の集會に参加するよう招待されていました。私は自分の体調がもつと早く回復すると思っていて獄から「行きます」と応えてきました。でもまだ体調は、万全ではないので娘のメイに付き添ってもらいつつ京都入りしました。

第1回の反戦集會が開催されたのは2007年です。「このままでええの!! 日本と世界 10・21反戦共同行動IN京都」として、国際主義、国際連帯を重視しパレスチナ連帯を訴えたのがはじまりでした。その集會後、久しぶりに円山公園から河原町通りを通って市役所までデモ行進を敢行しています。何百人ものデモ隊が登場し当時注目されるようになり以降毎年行われて今年で16回を数えたわけです。

今年のテーマは「新しい資本主義」に抗し、軍拡・改憲を阻止する大衆運動の構築へ」です。講演したのは「変革の

いろいろ当時は分かれて競合したり対立してきた人びとも、若い人びとも一堂に会しています。対立の教訓があったから一緒にやる大切さもまた理解している人びとです。

集會当日の16日は午前中に大谷廟にある旧友の墓参りが予定されていて、私も参加しました。この日は朝から太陽が夏のように照りつけていて暑く、まだ階段を歩きなれない私は六角堂まで上って、さらに上の大谷廟のてっぺんにある墓に奉じるお札は友人に託しました。獄では22年間ほとんど階段を使用しません。移動はエレベーターを利用しフラットなところを歩くのみです。そのため獄を出て、歩くりハビリはとつても大切でした。まだ下りる階段は足が凍んでしまします。そんな状態でしたので結構疲れ、ホテルに戻って20分ほど休憩してから円山公園に向かいました。

日本での大衆的集會は1969年以来

会場の近くから中の熱気と講演の声が

原動力であり、その土台となるべき民衆運動の課題は何か」と題してドイツ現代政治が専門の大阪大学大学院教授の木戸衛一さんです。国会報告を服部良一さんが。チョウ・パクさんらによるミニライブでは、差別排外主義との戦い、反戦・平和を唄いました。他に連帯の挨拶紹介などです。私の挨拶は、ミニライブの後の午後4時からでした。

わたしは何を語ろう。22年もの間、獄中にいたので対話の機会もありませんでした。「指示以外のことをしてはいけない」という人間的な能動性が懲罰となる獄中で、しゃべる機会も稀です。そのため私は声帯を退化させないためにラジオ体操の機会に「1、2、3」の掛け声は大声を張り上げるよう心がけたり、月一回のコーラスクラブに参加して30分の発声練習と合唱で声を張り上げたりと努力してきたのですが、おしゃべり禁止の後遺症が確かにあります。

第一に声がますます低くなっていること、第二に、滑舌が悪くなっていること、第三に獄での「またか」というような注

響いてきて、私はさつきまでの疲れ気分は吹っ飛んでわくわくしてきます。日本での大衆的集會なんて、最後は69年のことだから53年ぶりだなあ」と当時を思い出しつつ会場控え室に着くと、講演者の木戸先生の声が響いています。それからチョウ・パクさんたちの反戦ライブが始まりました。そうか、昔の集會は初めから終わりまで「われわれワァー」というアジテーションだったなあ、と反戦ライブの曲のリズムに身体を任せつつ出番を待ちました。

ライブが終わって私の名前が紹介されて、舞台中央へと進みました。何百人もの温かい眼差しが私に注がれます。拍手と応援が私の気持ちを素直にしてくれま

す。「みなさん、こんにちわ」。自然に言葉がこぼれます。「まず実行委員会の皆さんと今日ここに参加されたみなさん、お招きいただきありがとうございます。19歳の時から変革の道歩んできました。もう何年経ったか数え切れないほどです。その多くの戦いの中では過ちもあったし

意や指示を聞き流すことに慣れていて、獄を出てからも知らず知らず人に話を聞き流してしまっていることに気づくことがあります。また第四に獄を出てから、しゃべり始めると頭で描く言葉が物理的に口から言葉となつて出てくるのがもどかしくて、なんだか慣れない感じが続きたりしていました。声を鍛えきれいないなあ、話しや言葉遣いを実践的にリハビリしていかないと……思っていました。でも結局そんな時間をとれず、大声を出すように当日努力するしかないな、などと思いながら京都へ向かいました。

夕方ホテルに着くと既に集會実行委員会のスタッフが待つていてくれました。50年前の友人もいます。歓迎の宴がロシア料理店「キエフ」に用意されているとこのことで移動し、そこにまた50年前の友人たちもいて、打ち合わせをし歓迎を受けました。再会、新しい出会いに胸を熱くしました。20人近い実行委員や参加された方々が自己紹介するのを聴きながらそれぞれの戦いの人生が交差するのを感じます。赤ヘルメットや白ヘルメットや

良いこともありました。今、この場で思いつくのは50年前に共に戦った50周年を今年迎えている共に戦った連合赤軍の人たちやリッダ闘争を戦った仲間たちです。彼らが今ここにいて見ていてくれる、そんな思いで今ここに立ちました。

獄中から22年を経てここに立ちながら、実行委員の方々が私が市民社会の中に再び参加し市民運動を担う一人として共に戦えるようにこの場に招いてくださったこと、本当にありがたく新しい気持ちで再出発したいと思えます」と述べました。

そしてみんなの講演や、反戦ライブの歌の意味を考えながら、日本はどうしてこんなひどい国になってしまったのだろう、もともと昔からひどかったのではなにか、「成熟した資本主義国」といわれながら実際には人権の保障のない家父長制の「未熟な資本主義国」ではなかったかと思うと述べて、自分の経験に基づく二つの点から語りたく話を始めました。ひとつは獄中の人権侵害の状況、もうひとつはパレスチナから見えた世界と日本の現実です。

日本の獄の人権侵害の第一は、私自身の懲役労働の1時間の労賃が7円30銭であったことに示されます。1年間の労働（午前9時から午後3時まで約4時間半から5時間）の合計額が約1万2000円だった点を挙げて「奴隷労働だと思いませんか？」と訴えました。これでは刑務所を出てまじめに働こうとしても生活する準備資金が足りない、世界的な水準から見ても日本の刑務所懲役労働に見られる立ち遅れた現実を訴えました。

第二に日本の国民健康保険は国民皆保険と言われながら、受刑者は健康保険で医療を受けられずに刑務所で苦しんでいるのが現実です。非拘留者、受刑者は法務省の管轄下で医療を賄うとされており、国民並みの医療が受けられない刑務所の医療の貧困の実情を訴えました。

第三には、一挙一投足を監視する人権侵害の実態です。マニュアルとシステムが明治監獄法を引き継いでおり、人権侵害という自覚が当局、看守側にないために日々人権が損なわれている点を訴えました。

障されず苦しんでいます。林外相はウクライナまで避難民を迎えにきました。日本の足元でアジアやいろいろな国の人びとが難民申請し、それが受け入れられることを切実に望んでいるのを政府は無視しています。メディアの多くもダブルスタンダードの一方を報じています。ウクライナ国営放送のようなウクライナ問題の報道の仕方です。

中東にアルジャジーラという放送局がありますが、そのモットーは、「ひとつの意見があればもうひとつの意見がある」です。アルジャジーラは、もうひとつの意見を意識的に報道しています。日本の中にいると世界が見えませんが、「法治」からして欺瞞やまやかしに満ちています。主権在民は日々形骸化され民主主義の名で格差拡大や大企業のための（トリクルダウンの）政策が採られてきました。多くの国々にジャングルの掟がまかり通っています。パレスチナから見える世界は日本の「法治」からは見えないのです。だから想像してほしい。もうひとつの意見があり、もうひとつの現実

第四に死刑制度の存続です。1991年に国連総会決議で死刑廃止の議定書が採択されながら日本政府は批准をせず、世論の8割以上が死刑を望んでいると主張してきました。国連人権委員会は「世論は人間の生命の不可侵を左右する存在ではない」と日本政府の主張を批判しています。政府自身が死刑を望んでいるのです。日本政府は国際基準に沿って国民に死刑廃止を啓蒙する義務があると訴えました。また無期刑が終身刑化されている現実の司法の厳罰化を批判しました。

世界を作り上げてい3る ダブルスタンダード

もうひとつの点はパレスチナから見える世界、日本の姿です。そこではアメリカを中心とする支配層が二重基準・ダブルスタンダードによって世界を作り上げている現実です。彼らの二重基準が実際には世界秩序を破壊しているからです。2003年のイラク侵略戦争時、「ブッシュのプードル」といわれたイギリス・ブレア首相の顧問が声を大にして「法治

の正義があることを。理解することは難しくても今活動し生きている場からいつも想像することはできます。

中国外交正常化から50年、沖縄返還から50年、連合赤軍事件から50年、リッダ闘争からも50年目の今年を迎えています。今、世界の二重基準に目をむけ世界の人びととともに立てるように世界の人びとを想像し交流し国際主義、国際連帯の力を育て、世界と結び合って日本を変えようと訴えました。

「日本の内側からは世界が見え難いのです。世界を日本を変えよう。本当の民主主義、主権在民を作り出そう。本当の民主主義を実現するためには政治を変えないといけない、自民党を変えないといけない。野党は、市民のネットワークの中で作っていくしかない。世界の民と連帯し日本と世界を変えよう。やはり言葉と行動こそが世界を変える力です。異議なし！この世界を超えて異議のある人びとと出会い、話し、日本を世界を変えていこう！その一員として私も参加していきたいと思います」

国家には法による支配を、その他の国々にはジャングルの論理を」と、つまり弱肉強食の秩序を訴えていたのですが、今の世界が現前にあります。

ダブルスタンダードとは同じ基準が適用されない公正さのない世界秩序のことです。イスラエルの占領に抵抗し祖国を取り戻すために70年以上戦っているパレスチナ人がテロリストで、ロシアの侵略と占領に抵抗するウクライナ人が英雄というダブルスタンダード。ウクライナの民が英雄ならパレスチナの民も英雄です。アメリカ軍やイスラエル軍の戦争犯罪はロシアの比ではありません。今もアフガニスタン、イラクの人びとは戦争犯罪に何の保障もなく苦しめられています。ロシアの領土の併合を許さないといいながらイスラエルによるパレスチナの領土併合をアメリカは許しています。イランの核は許さずイスラエルの核保有は問題にされていません。

難民問題もそうです。アメリカ、イスラエルの犯罪によってイラク、シリア、アフガニスタンと多くの難民が今も保

以上のような内容を語りました。

実行委員の方々も私のスピーチを喜んでくださったのは嬉しいことでしたし、舞台の下から握手を求め、参加された方たちと失礼ながら壇上から膝をついて握手し、また最後に腕を差し伸べあつてインターナショナルの歌をみんなと歌えたのは望外の喜びでした。

その後デモ隊は円山公園から出発し、河原町通りを通って反戦平和を訴え、自民党政治を批判しながら進みました。市役所前でデモ隊は解散しましたが、その後、80人を超える方々が懇談会に参加していました。そこでは何人もの方々が、自分の担ってきた運動について発言され、私は学習するばかりでした。懇談会でも話は尽きないのですが、私の安全と健康を配慮して下さる実行委員会のスタッフに急ぎ立てられて名残惜しく懇談会を途中退席しました。

こんなふうに、一歩前に進むことができたような嬉しい一日を京都で過ごしました。

(2022年10月20日記)

く身体劣化を競ってひけらかし、獄か

高揚した反戦運動のあの時代、武装闘争
ではなくて、大多数のそれぞれが自分を
一番良く知っている故郷に戻りそこに根
を張って非暴力直接行動を駆使して社会
政治的な暮らしからの変革を實踐してい
たら今より良い日本社会を生み出し得た
のではないか？ 日本の文化と化してい
る家父長的な社会を変え、アメリカ従属
の自民党政治を変え、差別と格差をこれ
ほど放置することはなかったのではない
か？と多くが語りました。

その一方、そんなことを今更言うのは
僭越で傲慢だ、俺は当時の反省の上にそ
ういう地域の活動をしてきたしそのうえ
で今がある、と言う友人もいました。長
く地域で実体を築いてきた友人はそれ
も若い世代への実務ばかりか思想的継承
の難しさを語っていました。出会ったみ
なが、現役で活躍しているのには驚き励
まされました。当時の大言壮語を笑い合
い、逃した夢を語り、また反省に返ると
いった具合です。

そしていつも最後には「年寄り」らし
く身体劣化を競ってひけらかし、獄か

ら出てリハビリ中？ 俺たちだつてリハ
ビリの毎日だよ、同じだよと、お互い残
された長くない日々を自分の生きている
場と有意義に楽しみつづつ社会と関わつて
いこうと語り合いました。

また、アラブで共に戦い獄死させられ
た、丸岡修さんの墓参が出来たのはうれ
しいことでした（丸岡さんは、獄で重篤
な心臓の病気に陥つたにもかかわらず日
本赤軍に対する国家の報復の如く「刑の
執行停止」による治療も許されず治療も
ないまま2011年5月に獄死）。

秋晴れのまだ暑い日、友人たちと汗を
流して墓を洗いながら、出獄も再会も叶
わなかった丸岡さんの無念の思いが私に
はじかに感じられました。

この日は丁度作家の高山文彦さんから
大分県の中津にある奥平家の墓を見つけ
て墓参してきたと、メールで墓の写真が
送られて来て墓参が重なりました。

また、獄中の私をずっと支援してくだ
さってお世話になったのに、病気が深刻

でお会いできない友人もいました。コロ
ナ時代の病院や施設は、入所者と会う条
件はほとんどないのがよくわかりました。
丁度東京に戻った後に、入院中でお会
いできなかった米澤鐵志さんが逝去され
たのを知りました。米澤さんは、関西の
私の救援会「さわさわ」を支えてくださ
った一人で、11歳の誕生日の前日に広島
市内の電車の中で被爆し、一緒にいた母
を亡くしつつ生き延びた方です。「核と
人類は共存出来ない」と、「語り部」と
してずっと人びとに語り続けて来まし
た。明大土曜会へ講演に来たことが縁になっ
て土曜会の由井りょうこさんが協力して
『ぼくは満員電車で原爆を浴びた 11歳
の少年が生きぬいたヒロシマ』（小学館
刊）の本が生まれています。ご冥福を祈
ります。

ウォーキングでのリハビリ

今回お会いした友人たちの多くも「一
病息災」でどこか体調の悪化を持病のよ
うに抱えながら元気で過ごしていました。
私自身も手術を終えて10月から少しず

られた若者たちの中から「武装闘争路
線」に走る流れが生まれたのはいわば歴
史的な必然でもあった、当時の選択に敗
北と過ちもあつたとしてもそれだけで総
括としてはならない、パレスチナに連帯
して武装闘争を戦い信頼を勝ち得た日本
人の集団として歴史的意義をあなたたち
は得てきたのだ、それなのに今更武装闘
争路線を誤りだとか「歴史的存在」を捨
象して「良き個人」として反省するだけ
でいいのか？ それよりも日本の権力が
振りまいてきた悪評を引き受けて歴史的
意義を護るべきだという趣旨の、私への
批判的助言もありました。「悪評」を引
き受けるのはやぶさかではないけれど、
そしてパレスチナ連帯を今も確かな誇り
としているけれど、私としては、アラブ
の戦いの中で気づいてきた日本における
過去の「武装闘争路線」、また無辜の人
びとに被害を与えてしまったあり方は、
はつきり否定するところから、今の現実
の変革に関わって行くことが責任ある態
度と思つている旨語つたりしました。

誰もが後知恵でしか語れないのですが、

さいました。

かつての友人たちとはお互いの出合い
の日々の思い出話や、若い私たちが革命
の勝利的変化を信じて戦つた日々を語り
合いました。また、私がアラブに発つて
不在中の日本の変化を話してくれる友人
もいました。ことに「連合赤軍事件」の
衝撃、私の逮捕とその時の被害や弾圧の
ひどさを語ってくれる友人もいました。

国内国際的にヴェトナム反戦運動が広
がつたあの時代、あの状況で正義感に駆

られた若者たちの中から「武装闘争路
線」に走る流れが生まれたのはいわば歴
史的な必然でもあった、当時の選択に敗
北と過ちもあつたとしてもそれだけで総
括としてはならない、パレスチナに連帯
して武装闘争を戦い信頼を勝ち得た日本
人の集団として歴史的意義をあなたたち
は得てきたのだ、それなのに今更武装闘
争路線を誤りだとか「歴史的存在」を捨
象して「良き個人」として反省するだけ
でいいのか？ それよりも日本の権力が
振りまいてきた悪評を引き受けて歴史的
意義を護るべきだという趣旨の、私への
批判的助言もありました。「悪評」を引
き受けるのはやぶさかではないけれど、
そしてパレスチナ連帯を今も確かな誇り
としているけれど、私としては、アラブ
の戦いの中で気づいてきた日本における
過去の「武装闘争路線」、また無辜の人
びとに被害を与えてしまったあり方は、
はつきり否定するところから、今の現実
の変革に関わって行くことが責任ある態
度と思つている旨語つたりしました。

誰もが後知恵でしか語れないのですが、

さいました。

かつての友人たちとはお互いの出合い
の日々の思い出話や、若い私たちが革命
の勝利的変化を信じて戦つた日々を語り
合いました。また、私がアラブに発つて
不在中の日本の変化を話してくれる友人
もいました。ことに「連合赤軍事件」の
衝撃、私の逮捕とその時の被害や弾圧の
ひどさを語ってくれる友人もいました。

国内国際的にヴェトナム反戦運動が広
がつたあの時代、あの状況で正義感に駆

られた若者たちの中から「武装闘争路
線」に走る流れが生まれたのはいわば歴
史的な必然でもあった、当時の選択に敗
北と過ちもあつたとしてもそれだけで総
括としてはならない、パレスチナに連帯
して武装闘争を戦い信頼を勝ち得た日本
人の集団として歴史的意義をあなたたち
は得てきたのだ、それなのに今更武装闘
争路線を誤りだとか「歴史的存在」を捨
象して「良き個人」として反省するだけ
でいいのか？ それよりも日本の権力が
振りまいてきた悪評を引き受けて歴史的
意義を護るべきだという趣旨の、私への
批判的助言もありました。「悪評」を引
き受けるのはやぶさかではないけれど、
そしてパレスチナ連帯を今も確かな誇り
としているけれど、私としては、アラブ
の戦いの中で気づいてきた日本における
過去の「武装闘争路線」、また無辜の人
びとに被害を与えてしまったあり方は、
はつきり否定するところから、今の現実
の変革に関わって行くことが責任ある態
度と思つている旨語つたりしました。

誰もが後知恵でしか語れないのですが、

ただいま リハビリ中 SHIGENOBU FUSAKO'S 第2回

関西での再会と初の歌会



重信房子



泉水さんの法要

泉水博さんの法要

11月20日、東京で泉水博さんと彼を支えていたお兄さん、和夫さん、兄弟の法要が執り行われ、私も出席しました。泉水さんは、1977年、日本赤軍の奮闘闘争で指名され釈放された人です。泉水さんは、それ以前に獄の囚人仲間の病気が悪化しているにもかかわらず何の治療も施さない当局に憤り、世間に刑務所医療のひどさを知らせ、獄友を救いたいと、仮釈放の近い自分の身を厭わず、独り獄中

で決起した人です。そのことで裁判が始まり、救援関係者にはよく知られていました。その後、海外で活動中の1988年、フィリピンで逮捕されて日本に送還されました。旅券法違反などの公判を経て岐阜刑務所に収監されていました。2020年3月27日に83歳で獄死しました。泉水さんのことは松下竜一著『怒りてい、逃亡には非ず』（河出書房新社刊）に詳しく書かれています。その著書によると、泉水さんの逮捕時、公安当局は泉水さんが日本赤軍の脱落組と勝手に決め付けて御し易いと考えていたようです。「泉水の自供から一挙に日本赤軍解明が進む」と新聞記者らに吹聴していました。ところが取り調べで泉水さんは、日本赤軍の情報は「一言も漏らさぬ完黙を貫いて公安部を落胆させる。仁義に厚い泉水は、自分をコマンドとして遇してくれた日本赤軍に恩義を感じているようであった。警視庁は博の兄和夫をアパートに訪ねて来て、『特別に弟と面会させるか

ら、転向をするよう説得してほしい』と暗に提案する。和夫はきっぱり拒んだ」と松下竜一さんは記しています。そして和夫兄は被告人・泉水さんの拘留理由開示公判を請求し、弁護士席に立って、身内の情を利用して自白に追い込もうとした警察を批判し次のように述べています。「十一年前、ダッカのハイジャックで赤軍のいうまま、弟は赤軍が何であるかも知らず、ただ、お前が行かなければ百何十人の人質が救出されないといわれ、弟は理由のわからぬまま東京拘置所に移送されたのです。わたしは拘置所で面会するとき、弟の、自分が行かなければ人質が救われぬ、というので、条件は貰わずに行くと弟の決心に、わたしも生かされる限り生きていくれといつて、別れたのです。それによって人質は救出されましたが、何人の人がその事を知っているでしょうか。また、当局は弟のために何をしようか。また、当局は弟のために何をしようか。今度は赤軍のコマンドとして自白させ

つ動き始めましたが、まだ長く歩くと疲れてしまいます。スタミナ、持久力が無いのです。それに階段を降りるのは今でも足がすくみます。平坦なところも長く歩くと下半身が重く感じられて立っっているのが辛くなっています。ほぼ22年間、平坦なところしか歩いたことがなく、獄舎での移動の条件はエレベーターのみのため、階段の前で足がこわばります。特に出所したばかりのころは階段は何にかにつまらなさと降りることができませんでした。初めてメトロに乗った時も同伴の娘につかまりながらやっと降りたりしていました。今でも階段はとてども慎重に上ったり降りたりしています。同世代の友人たちの話を聞くと、やっぱり降りる階段は気を使うと言っていました。だから私はまず歩くりハビリを重視しています。これは、「腹壁癒痕ヘルニア」のせいでもありません。獄中で私が何度も開腹手術をしたための後遺症です。獄に居たときから傷跡が大きく膨らみ腹部が出てきました。筋膜のゴム状の弾力

が伸びきってしまい、筋力がない分、腸の機能不全から腸閉塞になったり腰痛になっていました。それを補おうと獄では出来なかつたウォーキングでリハビリしているところ。獄では土日を除くウイークデイに1日30分の運動時間があるだけで、それ以外は体操やちよつと体を動かして筋肉をほぐすなどの仕事も許されません。そんなことをすれば係官が飛んできて、「調査になる」と注意されます。獄では受刑者に対する非常に細々とした動作規則マニュアルがあつて、それ以外の動きをすれば「不正行為」と見なされ「調査」扱いになります。世界中のどの国でも考えられない前時代的な人権侵害の世界です。当局者の指示なしに動いたり声を出せばたちまち懲罰の「調査」対象になります。「調査」になると、その期間は受刑者の食事洗面以外一切の活動を中断させて当局側が「事情聴取」を行います。その結果勝手に運動していたとか、食事で残した物を後で食べようと持っていたとか、

係員への悪い言葉使いや抗弁などささいなことでも反省を求められ、「懲罰」となってしまうのです。私のいた病院では、受刑患者に対する懲罰は朝の点呼から夕方5時前の点呼まで食事以外、正面を向いてベットの上で正座して反省させることです。トイレは手を挙げて許可を得ることができるのです。私のいた施設はそれでも他の刑務所と較べるとずっと緩い対応なのだそう。でもこうした強制は精神的肉体的に病状を悪化させる行為であり、拷問まがいの人権侵害です。懲罰期間は、10日、1カ月など、違反とみなされた行為によっていろいろです。だから受刑者同士はだれも「調査」にならないよう、すばやく機転を利かせて助け合うのが常です。私が獄を出て一番の自由の実感、自由にしゃべり、自由に好きに歩けるといふ当たり前の人としての行動でした。その自由をまだまだ取り戻しきれていません。でも京都では、紅葉のはじまった比叡山から琵琶湖を眺める自由も満喫しました。

ようと、いろいろと手を使って責めているようです」

弟に、自供して裏切り者になるな、と訴える兄の姿は、「国への怨みを弟になりかわって吐き出すような兄の意見陳述であった」と松下さんは記しています。

そして最後に和夫さんは「今のわたしの気持ちとしては、赤軍とは何かといわれともわかりませんが、十一年間、弟の命を守ってくれた赤軍リーダーには、心からお礼を申し上げます」と締めくくったと著書は述べています。この和夫さんは1991年に逝去されています。私は、和夫さんが法廷で訴えた切々とした真心を、痛みとともに受け止めた遠い昔を思い返しながら今回の法事に参加しました。

コロナ禍や他の事情もあって泉水さんが獄死後、初めての法要です。岐阜刑務所に収監されていた泉水さんを支えて下さったボランティアの救援関係者の方々も岐阜から出席され、鶯谷のお寺で20人近くが集まって法要が執り行われました。私も岐阜の方々と救援連絡センターの山中幸男さんはじめ、これまで支えて下さ

歌会に提出された34作品です。合評会が終わると3時10分ほど前に福島先生も見えました。既に20人以上の方が席に着いておられます。

司会の開始の音が伝えられると、今日の歌会の紙を見ていたそれぞれが顔を上げました。福島先生が今日の歌会の始まりを述べます。お題は「墓場」、そして次に先生は「これまで歌で参加された重信さんが、今日初めてここに参加していただきます。拍手で迎えましょう」と紹介下さったので、私も一礼して仲間同士の挨拶はそれで終わり、ほっとしました。もとからいた仲間のように、みな温かな笑顔で拍手して迎えてくれました。

歌会のルールは取り立てて説明されませんでした。配られた紙面にある34首からそれぞれが7首をまず選びます。その数を集計して、各歌に何点が集まったか発表されます。その後、福島先生のさばきで得点の多かった順に0点まで残らず一首ずつみんなを論評していきます。福島先生から指名された人や発言したいと手を挙げた人が、そ

つた方々に感謝を述べ、再会した旧友や初めてお会いした方々と、法要の後の懇親会まで語り合いました。「重信さんとは53年ぶりの再会です！」と友人の一人が述べたように、旧友や初めて会う方々との出会いの場となりました。逝つた人びとのことを感謝とともに偲び、語り交流する、こんな時間を過ごせる幸せを噛みしめました。

初めての歌会

11月27日の今日、初めて歌会に参加しました。前号で述べましたが、私は出所にあわせて『歌集 暁の星』（皓星社）を出版しました。大学時代の友人が僧侶になり、「法事」という名で特別に獄で面会が許可になりましたが、その友人僧侶の師が法昌寺の住職であり歌人として著名な福島泰樹先生です。その縁で私も福島先生の主宰する「月光の会」の歌会に獄中から参加し、毎月一首送り批評を受けながら歌を詠む楽しみを味わってきました。これらの歌が福島先生の心のもった熱い跋文と共に『暁の星』に収め

の歌への自分の見方や批判や感想を手短かに述べるのですが、2時間の歌会の時間内に全てさばききるのは、さすがベテランの福島先生です。

今日の歌34首のうち得点が一番高かった歌は9点で2首ありました。

* 吾妻橋押上業平向島高き武蔵の卒塔婆が立つ

* どの筋へ折れても誰かの墓碑銘が俺に言うのだ いいんだ、進め

一首目はスカイツリーを卒塔婆として詠んだ現代社会への批判的な提起でしょうか。二首目はわたしも指名されて、死者から生者が励まされている自分の歴史にひきつけて感想を述べました。ひとつの歌にいったいの人のコメントが次々語られてくるので味わうとメモを取れないし、メモを取ると味わえずに聞き取れないとあせりつつ走り書きしました。

8得点の歌は6首ありました。私の歌も8点を得ました。私の歌に対するコメントは、「山笑う」の歌はあるが「空笑う」は明るくて、いい温かみのある一首だ、会えずに死んでしまった哀しみとそ

られています。

この「月光の会」には「黒田和美賞」という賞があつてその年の優秀な歌集に送られてきました。10月下旬、福島先生より、非公式に今年の「黒田和美賞」に「暁の星」が選ばれたと連絡を頂き、驚きと気恥ずかしさと嬉しさのまま「お受けします」と応えました。

11月の歌会の題詠は「墓場」と知り、こんな歌を詠みました。

空笑う秋の優しい風受けて会えずに逝きし旧友の墓洗う

この歌は、丸岡さんの墓参に訪れて青く明るい秋空を仰ぎ見ながら墓を洗ったときに零れた一首です。

月光の会の会員の歌人の方々と顔を合わせるのもこの歌会の日が初めてです。

合評会の次に始まる歌会のプリントが既に机に配られています。この歌会の紙の初めには、「第四二七回 月光歌会詠草」とタイトルが記されていて歌会の長い歴史を示しています。

タイトルの横に1から34まで番号の振られた歌が並んでいます。これが今日の

れが繋がっている、時間の経過を感じさせる、「秋の優しい風受けて」の「優しい」を「やさしい」とひらがなで表現したほうが歌の中身をもっと示すだろう、などなど、とつてもありがたく勉強になる点を指摘論評して頂きました。

もちろんこの時点ではどの歌を誰が詠んだのかわかりません。みな公平に自分の思いを意思表示します。最後の一首まで論評後、各自が自分の歌がどれだったかを名乗りながらその歌を詠んだ意味や他の人からの意見やコメントに何か言ったりします。こうしてたくさんいい歌を味わいました。

歌はそれぞれの見方があり自分の感動した歌が必ずしも選ばれる訳ではありません。みな積極的に活力があつて、もの見方、目を開かせてくれて楽しい、そんな歌会を初体験しました。

「前号の訂正」P106上段8行目「いいかもと思いましたが」↓「いいかも」と思い

P107中段5行目「上野入谷にある法昌寺」↓「台東区下谷にある法昌寺」



桜小学校の校庭の樫の木

塀の外から覗いていると、週末で授業はないけれど子どもたちが校庭でスポーツ練習中。
「お、門が開いてる、ん？ 関係者以外立ち入り禁止？ 俺たちだつて関係者だ

ろ？ 入ろう」
私たちは小学校の校庭に入り、そこにいた教師に話して奥にどしりと立つ樫の木に向かいました。
この樫の木は校歌にも歌われていて桜と共にこの学校を象徴する巨木です。
「この樫の木、当時俺たち4人で幹の周りを抱えたなあ」とM君。校庭の地面を踏みしめながら、ここで私は人間らしい教育を受けたなあと感慨深い。
近寄って樫の木を見上げるとやっぱり大きい。ベンチに座って樫の木を見上げながら、私たちは小学校時代の話をし、今その時の子供たちがどんな大人になつてどうしているか、次から次へと語るM君の話に耳を傾けました。M君は「小学校三年の担任の先生に会った時俺がよく先生に殴られた話をしたら、そんなことあったか？と覚えていないんだ。此畜生こんなふうになられたんだつて一発殴つてやりたかつたよ。熱血で生徒の為に夢中になつて思わず殴る奴もいたな。今は空気が忸度そんたくが怖くてまっすぐで良い先生が教育し難いらしいよ」とM君。

私たちは大人になった。樫の木を見上げながら、あの時自分たちや社会にあつた本当のことを言える空気が勇気ある人びとの発言はどこに言つたのだろうか？
いつのまにか、言つたつて変わらないと諦めに支配されている今の日本社会。典型的な庶民のM君まで庶民だからこそ、今の政治を憂慮しています。M君ら子ども時代の昔の懐かしい友人と会う、それが社会を知り学ぶ一歩であり楽しいハビリでもありました。
宮台真司さん襲撃事件
宮台真司さんが襲撃されて重傷を負つたというニュース。真相は分らないですが、襲われ傷つきながらも決して抵抗をやめなかつた宮台さんの思想の力が、殺されず生き残れた原因に思えます。相手はプロだから殺さず警告に留めたという考えもあるかもしれませんが、私にはそう思えません。
この襲撃事件は言論封殺の為だという推論が多く出ています。事件を受けて作家の島田雅彦さんがツイッターでこんな

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

ハビリ中

第3回

重信房子



小学校の校庭で

小中学校時代の友人に会いました。我が家が1950年代、世田谷で食料品店を営んでいた時代の近所の同級生M君です。獄中に何度かお便りをいただき、近頃メール交換を始めたところです。60年以上ぶりか。先生によく叱られていた気の良い暴れん坊のM君を思い出します。
M君は「会つたら俺のことわかるかなあ」と言っていました。待ち合わせに現れた彼は昔の暴れん坊のイメージから大いに変化。「あ、ふうちゃん久ぶり！

俺だつてわかる？ 分かんないんじゃないやないかって俺心配でさあ」とM君。「あら、分かるわよ！ でも昔からは想像出来ないジエントルマンね！」が、私の挨拶の第一声です。
たちまち時空を超えて桜小学校、桜木中学時代の関係にスッと戻る不思議。取りも利害もない裸の人間関係だったあの頃の私たち。「ニコニコ堂のえいこちゃんは今もう亡くなられたよ。Kちゃんのご主人の病状が深刻で大変そう。少し経

って誘うことにしたよ」などと当時の近所の同級生の消息を伝えてくれます。
「昔の学区域辺り行きたいだろ？ ふうちゃんち、まだそのままあるぜ」と言うM君に「えー!? うちの家？ 1947年かに建てた家がまだあるの!? 見てみたい！」と同意して、まず世田谷線上町駅近くの元実家の辺りを歩いて探索することにしました。
ボロ市通りに近い角地に、そこだけ昭和のままの古びた建物が一軒。懐かしい我が家が私を待っていたように昔の佇まいを残してそこにあります。私が中学三年生の時に引越してから、壊すだろうと思つていた建物はその後バーになり、白洋社の事務所になり近頃はブティックをやっていたというM君の話にカーテンの隙間から中を覗いてみました。
あそこが玄関、ここが庭でイチジクと白桃の原木があつたね、と庭だつたところに立っている建物を見回しました。道路や脇道は驚くほど狭く感じられて子ども頃の頃と違う風景です。
その後、私たちが通つた桜小学校へ。

果と改善を求める要望書を明治大学の学長に提出したそうです。

同様のことを行った国際基督教大学、早稲田大学では大学当局側から改善協力の約束があったが、明治大学ではアンケートを行った団体や背後関係ばかりを聴かれて受け入れてもらえなかったそうです。

また、学生のAさんは、前回の衆議院選挙の時に、「大学生は選挙に行こう」というポスターを貼りたい、と事務室に行ったら、最初は拒否されて、「私の学部の学部長の賛同を得て貼ることができたということがありました。でもポスターが貼れたのは学部があるキャンパスだけで、次の年の参議院選挙の時にも『明治大学生は選挙に行きましょう』というポスターを作って、明大駿河台の事務室に行ったら、一度受け取ってくれたんですけども、こういうポスターはあまり良くない。みたいな感じで拒否されて、せっかく作ったのに貼れないということもありました。選挙に行こう」というのは、すごく普通の事。それを明治大学



明大土曜会でインターナショナルを熱唱

が拒否するということは、選挙に行くことを奨励しないということなのかなと感じて、大学という場ですごく変だと思っんです。いわゆる政治的な話を大学側があまり受け入れないところがあるのかなと感じているし、行動する学生に対して受け入れない姿勢を感じました」と話していました。

B君は「大学史料センターというのが駿河台にあります。友人の話によると

学生運動に関する史料は、集めているが一切公開しない」といわれ、何を集めているのか目録も見せてくれないという対応でした。友人が理由を聞いたら『死人も出た』という話でしたが、60年代の明治では死人は出ていないのに、たぶん対応した職員の人、先輩から代々聞いてきて、おそらくよく分からないまま、『死人が出た』という話だけ聞いて、学生運動イコール死人というイメージを前提に話をしていると思うのです。目録にもしていないし、見せてもくれないので、奇贈があっても、シュレッダーにかけられてもわからないわけです。大学史料センターが作った年表にも学生運動のことは書いていない。唯一何があったのかわかるのは100年史に載っているものくらいだと思います。かつての学生自治の雰囲気や学生に知らせない、学生の話は聴かないということが明確に出ているのが今の明大の現状です。」と語り、私たちはただその酷さにびびくりしました。管理強化がこれほどとは…。

みな口々に、我々の活動の仕方が今の

ふうんと言っています。

「政治家はいくら不正をはたらこうと、党、警察、司法に二重三重に守られるが、言論人は正しいことをいった報いで襲撃されたりする。私たちは素手と言葉で自分の身を守るしかない。宮台真司氏が傷だらけになっても、致命傷を避け、抵抗したように」と。

世界は戦争に向かい、言論は命を張って護る時代になったとしみじみ思わずにはいられません。

前に私が娘に「日本の特性を一言で言えばどんな社会？」と聞いたことがありますが。「一言で言えば、出る杭は打たれるよ」と即座に答えました。

また、「建前と本音の激しく違う社会」と特徴付けました。そうだなあ、空気を読み、忖度し、息苦しい同調圧力、異なる意見に不寛容な社会、建前だけの『民主主義』。少数意見を受け入れるところに民主主義の価値と力があるというのに…。それでも日本の中でそれを変えようとする無数の人びとの活動が、更なる悪化を防いで対峙しているところに希望

が育っている…。

宮台さんの早期の回復と変わらぬ言論人としての活躍に期待します。

若人と母校を語り合う

12月3日、明大土曜会に出席しました。テーマは現役学生たちとの交流と忘年会です。この日は、私ばかりか同輩の友人たちも若者たちが語る母校明治大学の変容に驚きの声を上げていました。私が入学したのは1965年です。資料によると、1966年の明治大学の学生数は、約32000人。そのうち女子学生は一部二部合わせて19177人でしたが、2022年の学生数は31515人で女子学生は10743人。3人に1人です。そういう状況の中で、今20人位で活動している女子学生の代表の1人がこの若者交流に出席し話してくれました。

20人の中には、入管問題とか移民、難民の問題、貧困問題に積極的に関わったりする人がいて、個々の関心は違いながら一緒に活動をしているとのことでした。明大土曜会の年寄りたちに、彼女は最

近の活動、ジェンダー問題やセクハラなどの社会を背景とする「性的同意」についてレクチャーしてくれました。「性的同意」とはどのような概念でどういう状況にあるのか、明大で彼女らが行ったアンケートの結果がどんなものだったのかを話してくれました。

どんな小さいことでも、結婚している夫婦であっても、あらゆる場合に性的行為に同意をとることが「性的同意」であり、海外の大学だとそれを教える講習会などがあるが、日本では小中高でそうしたことが教えられないため多くの問題があるとのことでした。

明治大学学生を対象としたアンケート（全回答者536人）のうち90%以上が「性的同意」をとる行動をしてこなかったと答え、75%が「性的同意」の意味を知らないか勘違いしていたそうです。

536人中164人は性的被害を受け、8人が強姦を経験したと回答し、約70%が明治大学の性教育や被害対応は不十分と評価していることがわかったとのことです。21年11月にアンケートの集計結



映画「戦場記者」中東のガザ ©TBSテレビ

学生に困難を与えている、我々に重大な責任があると反省したり、それにしても酷い、社会の縮図だなあ、うちら同窓の先輩が何か申し入れできないのか、などと質問したり助言したり。引き続き若者たちと交流し支援していこうと語り合いました。そのほか盛りだくさんの報告や統一地方選挙への関わりなどの問題提起が終わり、忘年会に入りました。出席していた女子学生に司会が「こちらは、重信房子さんです。」と紹介すると「何をしますか？」と私のことを知らず聞き返したので、30人近い参加者がどっと笑いました。

でもそれが私にはとって嬉しかったのです。先人観なしに彼女たちとそれまで話してきたからです。彼女はさすが現在の若者、年寄りたちが口を開けて大笑いしている隙にすぐさまスマホで回答を見つけて一緒に大笑いしています。

忘年会が盛り上がったところで「もう時間です。インターナショナルで締めます」と司会が言うと老若男女肩を組み大声でインターナショナルを歌いました。

ます。山本美香さん、長井健司さん、後藤健二さん、拉致されて生還した安田純平さんらフリージャーナリストたちはあらゆる面で覚悟を問われつつ戦場に立ち

歌う老兵たちの顔が若いこと！ 不思議なほど輝いています。大変刺激的なりハビリの一日となりました。

映画「戦場記者」へのコメント

12月に公開される「戦場記者」（須賀川拓監督）という映画の短いコメントを求められました。私が映像を観て推薦できる映画ならコメントを書きます、と伝えてDVDを送ってもらい視聴しました。「戦場記者」は忘れてよい世界ではない人びとの置かれた戦争の犠牲をリアルに映像にしています。須賀川拓記者がいなければ特に日本人は世界の現実を知るこ

とが難しいとつくづく思います。

ここで描かれているのは、まず、イスラエルの圧倒的暴力と占領されたパレスチナ人の抵抗の現実です。「暴力」という現象に「どっちもどっち」と描かれがちなパレスチナ問題。占領している側と占領されている側は同じ位相に並べるとは出来ません。占領のシステムチックな暴力とそれに対する抵抗は違うからです。

続けました。その上、一旦ことが起これば「自己責任」のバッシングを受けてきました。それでも現場に立ち続ける、こうしたフリージャーナリストたちを忘れることはできません。

須賀川拓記者はTBSの中東支局長の特派員であり、身分は護られています。それでも危険を冒しながら恵まれた条件を活かして自分に出来ることを全てやろうと立ち向かっている、この須賀川記者を私は評価してコメントを書きました。

獄で出会った友と再会

獄で出会った獄友の一人と会いました。彼女は、どこで聞いたのか私が出所した日に、友人たちが催してくれた早稲田の歓迎会に現れたのでびっくりしました。彼女はその席上挨拶して「刑務所では重信さんと知り合いました。重信さんにもう絶対クスリをやってはいけなと言われて『絶対やらないよ』と約束しました。重信さん、出所おめでとう！ 私、約束守ってるよ！ 今は、介護施設で働いています」と、自己紹介していました。

この映画はイスラエルのエルサレムでの暴力がハマスの手製ロケット攻撃を生み、イスラエルが圧倒的軍事力で住宅地を空爆報復した結果、そこにいた住民がどうなったのかを詳しく追っています。

イスラエルの空爆による直径20m以上の深い破壊の穴、そこには何の軍事施設もないし、警告もなく空爆されて10人以上の子供らが殺されています。妻と4人の息子を失った夫の叫びと苦悩の映像が胸に迫ります。また、アメリカの去った制裁下のアフガニスタンで何が起こっているのか？ 映像が鋭く訴えます。

貧困と麻薬でアフガニスタン人社会からも忌避された人びとの映像はすさまじい。西欧諸国は女性の権利、民主主義を求めてアフガン政府に制裁を科しているがそれが果たして正しいのか、それ以前に生きることすら困難な社会に手を差し伸べる必要がないかと訴えている戦場記者の声に同感しながら見ました。

また、この映画を観ながら、他方でやはり真実を求めて戦場で命を失った戦士のようなジャーナリストたちを思い出し

以来、会おうよ、と何度も誘われていたのですが、病气や手術と続いて、やつと12月の忘年会がてら会うことができました。再会した彼女は元気で、抱き合いました。やつと会えたねと。素敵なパートナーも一緒に彼女は生き活きしています。良かったねえ。私を彼に紹介するのに「この人すごいんだよ！ いつもニコニコしてるけど看守と大声で怒鳴りあって喧嘩するんだよ。人権侵害だとか規則がおかしいとかいつも問題があった時に看守に指摘していたよ。だからいつも注目されてたよ。運動の時間も走ってるのは重信さんだけで元氣なお年寄りという評判でさ」などと言う。

「私そなんだった？」。他人が見ていた受刑者の私を散々聞かされて大笑いしました。獄の中にも人と出会う場がありました。この日、帰宅して名古屋刑務所で受刑者をまた虐待しているというニュースを聞き、受刑者処遇細則自体が人権侵害であり、虐待を生む原因だと訴えねばと思わずにはいられません。

(12月14日記)



師走に娘と訪れたポロ市

市議会議員選挙に立候補し、見事当選して今も議員です。市議会では同年配のおやじ議員たちの無自覚な差別発言に怒り、弱者救済に走り回る彼女は「私には天職だったわー」と来年も市議選に挑戦すると張り切っている後期高齢者です。高校時代の私たちのままおしゃべりを続けました。

もらいたくて徘徊したり、昔のポロ市の寒さを思い出しながらい呑みを買ったりと楽しみました。そんなリハビリ中の師走には心躍り、命のありがたさを実感します。でも獄中にも海外にも厳しい冬を過ごしている友人たちがいるのを忘れることはできません。そんなことを娘と語り合いながら新しい年を迎えました。娘と2人だけの正月は喜寿にして初めてです。静謐で心豊かに正月を迎えることができました。無理はできませんが、リハビリのお陰で体調も良くなっています。こんなふうに今年がスタートしたことに感謝しています。

私のインタビュート
イスラエル大使の反論

毎日新聞電子版に私のインタビュートの記事が12月27・28日に掲載されました。このインタビュートは、学生運動の歴史を1960年代の戦いの背景から語り、連合赤軍事件や1972年のリッパ闘争などに對する質問に答えたものです。驚いたのは、グラッド・コーヘン駐日イスラエル大使がすぐに、毎日新聞に私

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

第4回

52年ぶりの巷の師走

重信房子



師走の巷を味わえるなんて自由の身になったのだ。としみじみ実感します。1970年の師走から52年ぶりの日本の巷の師走です。あの70年は12月20日、沖繩コザ市での米兵の交通事故を契機に、米軍支配の差別と圧制に怒った沖繩の人びとが立ち上がり、「暴動」といわれる激しい抗議行動を起こした年です。そしてまた私にとってはパレスチナへの出発を考えていた70年師走でもありました。今年の師走は長い獄中生活を勞つて下

さる旧友たちの歓迎会兼忘年会に出席することができ、自粛しているアルコールも乾杯で少し飲むことになりました。土曜会の忘年会、月光の会の歌人たちの忘年会にも参加しました。また毎年恒例の加藤登紀子さんの「ほろ酔いコンサート」鑑賞と、その後の明治大学と専修大学の旧友たち、主にフント系の学生運動時代の仲間たちが催してくださった出所歓迎の会も嬉しいものでした。友人たちに記憶されている50年以上も前のエピソード

の中の私は、生意気だし実物よりずっと素敵でした。また友人の通う福祉施設のクリスマス会の公演も誘われて見学しました。高齢者介護の狭いケアセンターでしたが、施設スタッフたちが万全の準備で迎えて下さり、車椅子の方も認知症の方も一緒に劇をやり、スタッフが冬なのに汗だくになってカンペを捲って台詞を教えたり進行係をしたりと大いに笑わせる楽しい劇が進みました。80歳代の方々の劇やフランダース、車椅子の少女たちの「翼をください」のダンスも素晴らしいので、こんなふうに一人ひとりが主役になる集いの大切さを知りました。高齢者施設での虐待などのニュースの一方で、今の日本の社会の隅々で心あるスタッフの尽力により高齢者が自分を誇りつつ過ごしている姿は、我が身を考えても嬉しいものです。高校時代の友人とも、東京拘置所（東拘）での十数年前の面会を除けば約55年ぶりに、おしゃべりの再会もしました。旧友の一人は「東拘の面会であなたから刺激を受けたから私もやるわー」と早速

社会の根幹を揺るがすものだと思える」「彼女のような人物を有名人のようにあつかうのはどうだろうか」と話し、発言を垂れ流させず批判的に捉えるべきだなどと述べています。

私がインタビュエーの中でリッダ闘争について以下のように語ったのが気に入らなかつたのでしょうか。

「当時このPFLPの作戦はパレスチナばかりか、アラブ世界、イスラーム世界がこぞって支持賞賛したことをご存知ですか？ この闘争についてはイスラエル側の情報が一方的に流布されてきました。日本人義勇兵だけが民間人を虐殺したという事実はあり得ず交戦下の出来事です。勿論イスラエル兵も民間人を殺傷しました。またイスラエル側死者の中に「決して民間人ではないパレスチナ側のターゲットであった」アハロン・カテイルという、生物科学兵器を開発してイスラエルの建国前からパレスチナとアラブ人に対してその「兵器」を使い続けてきた人物もいました。これはパレスチナの戦いに日本人義勇兵が参加したものです。戦

ています。そこにも一切私の関与はありません。

第3に私やPFLPは、この大使が宣伝しているような「反ユダヤ主義」ではありません。私にもユダヤ人の友人がおり、過激なシオニズムと一緒に反対してききました。シオニズムは宗教を指しているのではなく、イデオロギーなのです。「パレスチナを占領しアラブ人を追い出してユダヤ人だけの国家を造る」というシオニズムイデオロギーを信奉する人たちと、ユダヤ人とは区別してきました。イスラエル政府は国連決議を無視してパレスチナアラブ領土占領を続けており、それが批判されると常に「反ユダヤ主義ヒトラーと同類」という論理でごまかすことは世界中でよく知られています。「反ユダヤ主義」などと騒いで批判を黙らせる論法がまだよく知られていない日本で、「反ユダヤ主義」のレッテルを貼ることにより私ばかりか掲載したマスコミを叩くことで怯ませて、イスラエルの政策を批判する言論の場が狭められることを私は危惧します。

争を肯定しないけれど戦いがある以上犠牲が生じます。殺しあうことが目的ではありませんが歴史のな戦争下にある戦場での、ひとつの軍事行動がリッダ空港攻撃です。忘れ去られようとしていた何百万人のパレスチナの人びとは抵抗の闘争によって再生していた激しい時代です。当時私は彼らの任務を事前には詳しく知りませんでした。しかし、パレスチナで根源的、人間的であろうとしたなら、それを実現するためにはもつともラディカルな形を取らざるを得ません」「無辜の人を傷つける可能性については、事前に奥平さんたちはPFLPとも語り合い、相手の命を奪うなら、当然自分たちも生きる権利がないと主張しようです」イスラエル大使に発言の自由があるように私にも自由な発言が許されて当然でしょう。私は刑期を終えて自由の身になっている日本人です。日本人が日本の憲法に則って自由に発言することは基本的人権です。

第2にリッダ闘争はPFLPの作戦です。日本赤軍の作戦ではありませんし、

国連決議を無視し、パレスチナアラブ領土を占領し、民族浄化を続けているのはイスラエル側であることをもつと多くの人びとに知ってほしい。特に最近のイスラエル政府はパレスチナ人の民族浄化政策を競いあつて選挙に勝つことを狙っている実態も知ってほしいと思つています。去年12月29日に発足したネタニヤフ政権は「ユダヤ人はイスラエルの全ての土地に独占的で議論の余地のない権利を持つ」と宣言して、国連でも何度も非難決議されてきた占領地に対し「政府は人権活動を促進する」と決定しています。公然とパレスチナ人抹殺を訴える極右政党も新政権に参加しました。今年、これまで以上にイスラエルの占領地拡大と暴力がパレスチナを襲うでしょう。人間の尊厳をかけた抵抗もまた激化せざるを得ないでしょう。

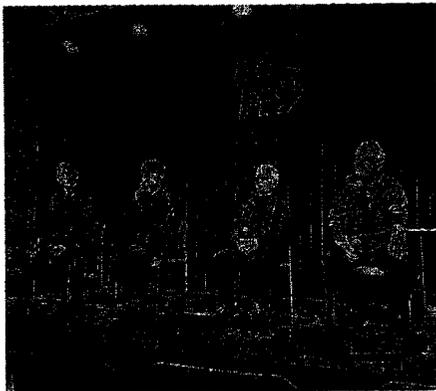
連合赤軍事件を語り合う

今年に入つて、かつて連合赤軍に加わり、あの事件の当事者となつた赤軍派時代の友人と会いました。この友人Yさん

私がリッダ闘争に関わつた事実はありません。マスコミの一部は無知か意図的か、リッダ闘争に私が関与したような誤った情報を流布してきました。数万人を超えるメンバーを持つ当時のPFLP組織の作戦に、アラブに来て1年経つたばかりの20代の、言葉も不自由なPFLPのボランティアの私が何をできたというのでしょうか。

イスラエル政府からも他のどの国からも、私はこのリッダ闘争で訴追されたこともありません。私がPFLP指揮下のボランティアを脱して日本赤軍を結成していくのはその後の1974年です。私が関与していないことは、イスラエル当局が一番よく知つていよう。なぜなら、義勇兵の1人岡本公三さんが自分だけ生き残つて逮捕されたことを悔やみ、作戦後に自殺をさせてほしいと願つた時、イスラエル軍のゼビ將軍は岡本さんの心情を利用して「事実を残さず述べたら、拳銃を与えて自殺させてやる」と嘘の契約書まで作つて約束し自白させたからです。そのことは軍事法廷で明らかにされ

は、私がまだ裁判を続けていた時に、東拘に面会に来て「遠山さんを死なせてしまつて本当に申し訳ありません」と、涙ぐんで謝罪していました。その時私は「生きて再会し過ちを語り合おう」と約束しました。獄の10分の面会では語り合うことは到底できません。友人のKさんも一緒に3人で会いました。短い東拘での面会を除けば51年ぶりの再会です。「よく生きていたね」とお互いに同じ言葉を吐きながら思わず抱き合いました。こうして昨日も会つていたように、昔と変わらない仲間同士の話が始まりました。赤軍派から連合赤軍に至る時代、根本的誤りは当時の日本で武装闘争に活路を見出し続けようとしたことだと、私は自らのアラブでの経験と反省とを語りました。パレスチナ占領下で弾圧を受けながら全人民が支持する抵抗手段の一つである武装闘争と、赤軍派が主張した日本での「武装闘争」はまったく異なります。赤軍派は日本で敗北や失敗を繰り返しても武装闘争を結集軸としていた分、「武装闘争をやる」ことを疑えず転換できず



「ロフト9」にて「REVOLUTION+1」上映後の会見

山上決起の映画をやろうと決めた時、週刊誌の記事にあった2行の情報を見てこれを書ける！と確信したそうです。その2行には、自殺した山上の父とリッダ闘争で自決した日本人戦士安田安之さんが同じ京大工学部の麻雀仲間だったということが書かれていたからだそうです。そこから日本人戦士たちがオリオンの星になろうと語り殉教した戦いに繋がりが、星になる、つまり山上をその視座からとらえようと考えたのでしょう。この映画は、アメリカの要請に合わせて戦争準備の防

衛費増額に走る政権と今の日本社会の悲惨な現実の落差を考えさせます。
娘と丁度見ていたアルジャジーラアラビア語版は、岸田首相が訪欧米で署名した軍事協力の内容をニュースで報じていました。トマホーク配備に始まる日本を前線とする戦争準備の軍拡路線が既に本格化しているばかりか、有事には米軍のみならず、英軍も日本領土で展開することが今回可能になったと報じていました。英国も含めて憲法違反の集団的自衛権の行使であるという報道には驚きました。こうした転換が日本のテレビでは語られていないからです。
世界から見える岸田政権下の日本は、歴史上かつてない好戦的な軍拡国家化に突き進んでいると喝破されています。岸田・バイデン会談などの危険な内容の報道があまりに小さく扱われ、さらっとしか報じられない一方で、ウクライナの戦況を詳しく伝え、ゼレンスキー発言を細かく解説する日本のテレビ報道には呆れてしまいます。思わずこんな一首が零れ

なかつたのですが、今回の映画は違いました。私は、山上徹也さんの安倍元首相銃撃は、私たちの時代に健全にあった、異議申し立ての自由を奪われた社会の閉塞状態の結果だと思っています。
警察管理社会の中で権力側の犯罪は行政府によって護られ、他方で政府やその政策が負うべきセーフティネットや福祉の責任を「自己責任」として弱者が踏みつけられてきました。
この「REVOLUTION+1」は、こうした現実を率直に描き、ああした銃撃でしか問題解決できないと思ひ詰めた山上（映面上の苗字は川上）の苦しくて哀しい状況を鋭く表現しています。そしてこの映画は日本の社会と歴史の根柢の中にこの個人決起を位置づけ、またパレスチナの歴史的現実を位置づけた点で、優れて普遍性を持ち得た映画になったと思います。それはパレスチナでの戦いの歴史をともした足立さんだから成し得たことでもあるでしょう。
脚本を共同執筆した井上淳一さんが上映後の会見で語っていたのですが、この

「追記」矢崎泰久さんが逝去されたことを知りました。
レバノン、パールベックにあるローマ遺跡のバツカス神殿の石畳を歩きながら、日本はアメリカのためにどうしてこんなにだめな国になってしまったんだろう、とつぶやいていた矢崎さんを思い出します。矢崎さんと語り合ったあの時代よりも今の日本は、ますますアメリカの植民地の姿に変わっています。
私が獄から解放されたので矢崎さんと千夏ちゃんと「創」で対談する予定でしたが、私の体調が回復せず、その機会を失い今年対談をするつもりでいました。亡くなられたと聞き、とても残念で申し訳ないと思います。
トイレのない山岳地帯で、足立さんと「連れションの仲だよ」と言いながら本当に楽しそうに草原を歩きまわっていた姿が今も目に浮かびます。矢崎さん、彼岸で対談をしましょう。

突き進みました。「武装闘争をやるのだ」という観念に取りつかれて武装闘争を担える主体形成のつもりで連合赤軍結成に至り、信じがたい道へと踏み込んだと思います。
私はそのことを赤軍派の過ちとして自覚しつつ、自分がアラブに発つてからどんなふうにならなうか、なぜ転げるように仲間たちが殺されていったのかなおも理解できない思いが消えなかつたので、そのことを聞きました。
Yさんは、もう50年以上経った今でも最初に革命左派から糾弾をうけた遠山さんのことを話そうと思うと涙が出てしまおうと言いがら、当時を詳しく語ってくれました。ああ森さんも革命左派から遠山さんを批判された当初、なぜ批判されたのかわからなかつたことが、すべての始まりだったと私たちは語り合いました。毛沢東主義の組織の規律ある成り立ち、いい加減で、無自覚な女性差別を持っていた自由主義のプントの組織の違いがあり、それを無理に森さんが整合させよう

としておかしくなつていった様子もわかりました。私たちは良くも悪くもプントだったなあ、と3人でしみじみ語り合いました。
Yさんは長い獄中生活を経て出所後、警察の妨害もあり簡単ではない長い時間の中で、社会的な位置を築いてきたようです。Kさんも自身の経験を語り、私たちは三者三様の人生の歩みを確認しました。そして今の日本と世界の悪化する戦争政策の現実に対して反省と誇りをもつて生き続けようと言いました。「今日はまず語らねば進めないことを語り合ったけど、次はただ、うまいもんでも食おう」とYさんが言い、それを約して別れました。
映画「REVOLUTION+1」を見る
去年の国葬にぶつけて緊急上映されて話題となった足立正生監督の「REVOLUTION+1」の完成版試写会が1月11日にあり、招待されて出かけました。とても良い映画でした。率直なところ、若松一足立映画はなかなか私には理解でき

九条違反の戦争の道
2023年1月20日 重信房子
「追記」矢崎泰久さんが逝去されたことを知りました。
レバノン、パールベックにあるローマ遺跡のバツカス神殿の石畳を歩きながら、日本はアメリカのためにどうしてこんなにだめな国になってしまったんだろう、とつぶやいていた矢崎さんを思い出します。矢崎さんと語り合ったあの時代よりも今の日本は、ますますアメリカの植民地の姿に変わっています。
私が獄から解放されたので矢崎さんと千夏ちゃんと「創」で対談する予定でしたが、私の体調が回復せず、その機会を失い今年対談をするつもりでいました。亡くなられたと聞き、とても残念で申し訳ないと思います。
トイレのない山岳地帯で、足立さんと「連れションの仲だよ」と言いながら本当に楽しそうに草原を歩きまわっていた姿が今も目に浮かびます。矢崎さん、彼岸で対談をしましょう。



パレスチナ人の抵抗戦士(PFLP機関紙アルハダフより)

当する国家警備隊を含め全土一括統制下に置く今までにない権限を持っています。

イスラエル内のパレスチナ人を今以上に二級市民化し、占領地併合によってパレスチナ問題をなくしてしまおうとする乱暴な圧殺の意図が示されています。

また、もう一つの極右政党で占領入植活動の拡大・併合を主張していた「宗教

シオニズム党」の党首スモトリッチは財務相に就きました。このポストは、占領政策全般と特に入植地の建設と拡大に権限を持ち、また占領下で自治政府にかわって代理徴収されるパレスチナ人の税金を握る大臣なのです。この「代理徴収金」は、パレスチナ人の財産なのに支払いを凍結したり、差し引いたり勝手に扱われてきました。それが更に酷くなることは目に見えています。ネタニヤフ、ベングビールとスモトリッチの3者によるパレスチナ領土の否定、全てユダヤ人のイスラエル領土として扱うという過激なシオニズムイデオロギーで、パレスチナ人を管理支配する方向です。この事態に抗議するパレスチナ人の抵抗は、生存をかけたインティファダと成らざるを得ないのです。

イスラエル軍は、ユダヤ人入植者のパレスチナ農民を負傷させオリーブの木を切り倒すなどの暴力行為は助け、パレスチナ人への問答無用の暴力、射殺などを繰り返しています。そしてイスラエル政府は抵抗するパレスチナ人を、「テロリ

スト」と宣伝しながら、国際法でも禁止されている集団懲罰を続け、抵抗者の家族の権利の剝奪、家の爆破破壊、追放などの弾圧を行っています。

占領軍の暴力と、占領に抵抗する住民の暴力を同列に並べて喧嘩両成敗のように論評するのは欺瞞です。しかしバイデン政権を中心とする資本主義諸国の「二重基準」によってイスラエルは、守られています。だから私は、何度でも訴えたい。侵略と占領に立ち向かうウクライナ人が英雄なら、イスラエルの侵略と占領と圧殺に立ち向かうパレスチナ人も英雄ですと。決してテロリストではありません。歪んだ大国の都合による二重基準が国際秩序を破壊し、ウクライナに見られる戦争への道へと今も進んでいます。ウクライナの即時停戦を訴えることはまたパレスチナの占領に対する抵抗とつながっていくと思っています。

鈴木邦男さんの逝去

篠田編集長が鈴木邦男さんの逝去を知らせてくれました。私は鈴木さんと深い

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

第5回

戦うパレスチナの友人たち

重信房子



ライラ・ハレドや、かつて共に戦った友人たちは、私が獄から出所した日から解放を祝して次々と連絡してくれました。パレスチナの仲間たちの声は私にはりハビリの大きな精神的エネルギーを与えてくれました。それに娘のメイがパレスチナの実情を教えてくださいるので今直面しているパレスチナをリアルに学べます。

新たなネタニヤフ連立政権の酷い政策と弾圧の結果、今パレスチナは、新たなインティファダ（民衆蜂起）の様相を

示しています。西岸地区の都市での全面的スト、ジェニンやナブルスでは組織を超えて武装組織を結成し、占領軍暴力に武装抵抗をしています。これらは強いられた抵抗戦です。国境を越えたパレスチナの仲間たちを思いながらパレスチナの現状について記したいと思います。

12月29日成立したネタニヤフ政権には超過激な右派政党が参加しています。イスラエルの歴史上最も過激な極右政権と、西側報道までが伝えている通りです。も

ちろん首相に返り咲いたリクードのネタニヤフ自身は極右であるばかりか汚職事件の被告人で、有罪になっても議会で首相の免責特権を狙い無原則な極右政権を成立させました。

この新しいネタニヤフ政権の特徴は、国際法も国連決議も無視し「占領地」と「イスラエル」という区分けをとっばら、全部イスラエルの領土としてパレスチナ人への支配と弾圧を始めたことです。かつてイスラエル政府とパレスチナ解放機構(PLO)の間で交わされた「2国家共存」合意交渉など、とっくに反故にしてきたネタニヤフです。この新しいネタニヤフ政権は極右政党を使って「全パレスチナのユダヤ国家化構想」を進める企みです。

ネタニヤフが自ら首相となるために、手を組んだ「ユダヤの力党」の党首ベングビールは「国家安全保障相」に抜擢されました。新設されたこのポストは、イスラエル国内の警察統括とこれまで国防省が管轄してきた占領下のヨルダン川西岸地区や、東エルサレムの治安維持を担



エルサレムでパレスチナ人の家を破壊して押し入るイスラエル軍 (PFLP機関紙アルハダフより)

「ト」に働き口を求めた結果、脅かされながら人殺しまでやってしまう。片や「地下アイドル」に女子高生が何百万もつぎ込む。「そういう犠牲者がいっぱい出るわけです。今の世の中、金次第で、命まで失ったり、女性であれば性を売って買いうるところまで突き進んでしまうような世の中です。自分たち労働組合は社会の規範を作らなければいけないんじゃない

か。職場の賃上げとか処遇改善を求める一方で、労働組合に駆け込んでくる人たちは、解雇や、パワハラで精神的に病んでしまう人が多かった。社会の規範が壊れる中で必死に生きていく孤立している人たちに何ができるのか？と考えるとき「お金より命だろ」と。命をどういう風に次に繋げて行くのかということ、労働組合の大切な役割だと思いませんか」と語っています。

「少し前、国労等が健在だった頃は労働組合の規範が社会に浸透していて、働き方でも「そんな働き方はだめだよ」とか、そこまでの犯罪は起きていなかったと思う。今では暴走する競争社会の中で、ちよつと間違えれば滑り台のように下降してどん底に突き落とされるようなことが、身近にどんどん起こっているということ、です」と。労働組合が命を守る者として求められていることを実感しました。

また、ウクライナとロシアの戦争を見ても戦争で犠牲になるのも市民であり労働者。ウクライナ国内でも徴兵で労働組合の権利どころではなくなくなっている。労働

ところが、鈴木さんが体調を崩したようだと聞き、また私自身も出獄して体調を崩し、お会いできず現在に至っています。

鈴木邦男さんの言論の底流には、自身の深く切実な反省と経験の思いが溢れています。そして彼には、正義を貫こうとした者、不当に虐げられた者たちに対する連帯と共感の優しい眼差しがありました。私の父を知る数少ない友人として獄の壁を越えて自由に話をしたかったという思いが募ります。

明大土曜会 元気な若者たちと

2月4日は明大土曜会に参加しました。この日のテーマは、現在の労働運動の学習です。全国一般・全労働者組合のSさんが話してくださいました。彼は、「過去に労働組合が賃上げ闘争のみでやってきたことが、また企業は企業内のことのみ考えてきた結果、社会は本当に荒廃しているのではないかと、まず現状を語ってくださいました。

多重債務に苦しんでいる人が「闇バイト

付き合いがあつたわけではありませんが、鈴木さんの言論に対する覚悟には共感することが多々ありました。左右の枠を取っ払って社会を変えようと追求し、自身が経験した暴力の過ちを率直に語り、「言論には言論で」と訴えてきた言論人です。その結果、鈴木さんは右翼からも糾弾されながら、進歩的言論を貫いたこととはよく知られていました。

私は、鈴木さんが獄に面会に来られて知り合い、何度かお話ししました。鈴木さんは産経新聞の記者となる1974年に我が家を訪ねて父と対話したそうです。

この時父が自分の経歴を語り、当時、政界、財界、官僚の不正義に対して立ち向かった民族主義者として、娘の行動を理解すると話したそうです。右、左と麓の道は違っても同じ山を登り見上げる月は同じだと例えながら、正義を貫く目標はそんな違いがないと話したようです。

私は笑いながら彼に言いました。

実は私の処に、父から手紙で、一早稲田大学の鈴木邦男という人物から会って話を聞きたいという連絡がきた」とあり

ました。丁度その場にいた私の友人が「その男は早稲田で左翼に対して暴力を振るつた、右翼のとんでもない男だ」と言うので、その旨父に手紙を送りました。そんな人と会わないほうがいいと思つたからです。ところがペイルートから日本への手紙は2週間位かかる為、手紙が着いた時には既に鈴木さんと父は話した後でした。

獄中の初対面で鈴木さんにその話をしたら、「もし手紙が付いたらお会いできなかつたんですね。そうなんです。僕は早稲田で、左翼と暴力的に渡り合っていたんです。手紙が先に着かなくてよかつた」と大笑いしていました。それから何度か見えて木村さんを紹介して下さいました。

獄の面会は長くて15分の東京拘置所で「獄を出たら父の話も教訓もゆつくり話をしましょう」と言いました。

振り返れば、人生をかけて戦つたのに、右も左も日本を良くすることが出来なかつた、だから今どうしていいか、これからの日本を語り合おうと話しました。

日曜金曜日

編集委員
児宮健一 宇都宮淳 宮崎友子 田中優子 中島岳志 本多勝一
定価600円(税込)

3月の特集予定

統一地方選
女性議員を増やすには?
3・11から12年
原発回帰でいいのか

半年 24冊 12,426円(1冊82円お徳)
1年 48冊 24,343円(1冊93円お徳)
*月極自動引落し(1冊70円お徳)もあります。

書籍のご案内
沖繩は孤立していない
世界から沖繩への声、声、声。
乗松聡子 編著
世界の諸島が「オキナワ」への責任と決意を語る。3年にわたって「琉球新報」に掲載された「正義の責任」世界から沖繩へに加筆、編集しました。
定価1,500円(税別)

お申し込みは
0120-004634 0120-554634
新編 読者申し込みの方に
最新号を贈ります
発送開始後の途中解約には応じかねます。
(株)金曜日 <http://www.kinyobi.co.jp>

「こんな凶悪犯人を早く捕まえるべきだ、フリーピンはなんていい加減な国なんだ」という印象を増幅させるでしょう。でも問われているのはこちら側です。報道の中で、「犯人」とされている被疑者を、推定無罪の原則に照らしてどう報道すべきか、日本は報道倫理を踏まえているのか? こうした報道のされ方を経験した者としてまず疑問です。また携帯電話を持つとか、私物を持ち込むとか、これらは様々の国の入管施設では寛容に扱われています。彼ら4人がいた「ピクタン収容所」は出入国管理施設で、刑務所や拘置所と違います。日本の報道は混同しているふしがあります。

日本の入管施設が今どうなっているか
また驚きです。大学生の多くは厳しい多額の支払いに追われているようです。若者に借金を背負わせることで、その人のこれからの人生を借金漬けにしてしまい、人生の選択肢も奪っています。結婚も子育ても難しい。少子化に歯止めを、というなら政府がこうした若者への加重債務をチャラにする政策を考え、当然でしょう。義務教育ばかりか大学教育までは無償化にすべきだし、返済無用の奨学金制度を拡充するべきだと改めて思いました。医者や技術者などを目指す多くのパレスチナ人たちの留学を受け入れたソ連や旧東欧諸国は、大学まで無償でその点優れていました。

不明ですが、スリランカ人のウイシユマさんに対する過失殺人を見ても、日本こそ人権配慮に世界から立ち遅れているとみるべきではないかと思えます。また日本はフリーピンと「犯人引き渡し条約」を締結していません。日本に犯人を引き渡す義務はなく、自国の司法を優先して当然です。それを日本側は、決して米国に対して取らない様な態度をフリーピン政府に対して取っています。マルコス大統領訪日前に犯人を引き渡すよう圧力をかけ、間接的であれ他国の司法に政治介入し、控訴棄却を実現させたと思わざるを得ません。イスラエル報道、ウクライナ報道を含め、「日本の報道が偏っている」と自覚をもって捉えるリテラシーを

日本では、授業料が高いため、多くの学生が奨学金、アルバイトに頼らざるを得ず、勉学にも支障があります。「学生寮に入れないの?」と聞くと「今時、学生寮はない」と学生が答えたというので

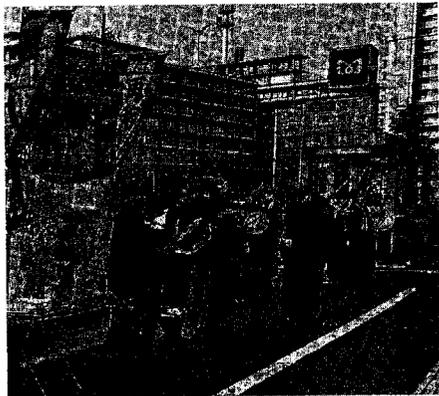
日本のテレビを見ながら
娘のメイがよく言うことでもありますが、海外の報道と比べて日本の報道の仕事が、

鍛え合いたい、と日本のテレビを見るたびに思っています。
大地震の被災地の苦しみ
トルコ・シリア国境地帯がかつてない激しい地震が発生しました。シリアの内戦によって難民となった多くの人々が被災し、日を追うごとに死者の数が増え続け、10万人を超える可能性があるとの報道に言葉を失います。シリア側の被災地は、米軍の影響下にあることや、米政府からのシリアに対する経済制裁が援助や物資がシリアに届くのを数日も遅れさせたりしていることが日本では報道されて

また若者たちが今回明大土曜会の仲間

新年会になって、今日の講演に來られた労働組合の方たちが、「ここには老学共同があるなあ」と若い人たちの間に入ってレクチャーしたり飲んだり、とても楽しそうに話していました。

方があまりに日本人しか視野にないのに驚かされます。スポーツでも勝敗そっちのけで日本人だけの活躍を取り上げます。また現地フリーピンに日本の報道陣が大挙して押しかけ、日本人の強盗事件を取材する在り方もテレビで見えていて疑問に思いました。事件のトピックスを狙うせいか、わつと群がり、日本人だけを報道する姿勢は、昔と変わらないのかもしれない。



脱原発を求める「呪殺祈禱僧団四十七士」の抗議の折衝

プリントで戦ってきた同時代人として自己史を晒しながら「重信房子の『実存』と抒情歌集『暁の星』を読む」という論評を寄せています。岡部さんは、「マルクスやトロツキー読み吉本読みわたしはわたしの実存でいく」この歌を読むと、重信がパレスチナに行ったのは、赤軍派の闘争方針に従ったというよりも、己の『実存』の問題ではないかと思う」と述べて「実存」とは、自分が自分であることとを失わずに存在しようとすることであり、「党派に属すれば。党派の掲げる政

3・11を忘れない
経産省の前で死者が裁く
12年前、東日本大震災があった3・11の日、私は八王子の医療刑務所にいまし

治方針が闘争を続ける自己の根拠に代わってしまふ。そこには己の『実存』はない。とすれば、自分の生き方の決定権を失わないこと、つまり自分のことは自分で決める自由を失わないこと、それが『実存』と言いつける条件になる」と述べ、この歌集が『実存』の歴史を確かめる記録としてであると評しています。その上で「斬撃の司令部室の空薬莢一輪挿しのムスカリの花」テロリストと呼ばれるいわれは秋ならば枯梗コスモス吾亦紅が好き「寒あやめ届けばふいに記憶満つ自裁の旧友の差し入れし花」などをあげ、「重信房子の歌は、その記録を様々な花(自然)によって包み込むことで、メッセージ性の強い歌ではなく、抒情性を湛えた詩の表現にふさわしい。このような歌があるからこそ、『暁の星』を推すことにはためらいはなかった」と述べています。こうした論評の数々を振り返り学んでいます。

た。東京拘置所から移管されてまだ6カ月も経ていない頃です。腫瘍マーカーの数値が下がらず、シスプラチンのゼロックス化学療法の治療中で副作用が強く、たびたび中断しながら治療を続けていた体調のすぐれない時です。刑務所の分厚い壁がミシミシと音をたて、鉄製の古いベッドがギシギシ言いながら動いた程強い揺れが始まりました。
地震時にはベッドの下に入って身を護るよう言われていたので慌ててベッドの下に入り隠りました。担当官が「どんな揺れでもこの建物は頑丈にできていて壊れないから安心して！」と大声で訴えていました。午後4時過ぎの夕食前のラジオで、三陸沖が震源地でかつてない被害が発生していると知りました。その惨状を映像で初めて見たのは懲役労働に参加した後、テレビが夜7時から2時間見られるようになった2022年の3月でした。津波に飲み込まれていく人家、水素爆発する福島原発施設の映像を1年以上たつて見て、その恐ろしさを直に感じました。

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

リハビリ中

第6回

重信房子



リハビリの春

「月光の会」の歌会で

「月光の会」の歌会に参加しました。題詠を批評しあう歌会です。今回のお題は、「二」です。歌人たちの詠んだ三十六首の題詠から各自が六首選びます。それを集計し、最高得票から0票の歌まで三十首を順次みんなで批評していきます。最後にそれが誰の作品だったかが明らかにされます。月光の会の会員は様々な傾向の歌人がいるためか、大量得点はあり

ません。今回の最高得点も10票の歌で、「背を丸め終バスを待つ影二つ毛玉のように黙りこくって」。次の9票の歌は「いんいちはいちであります敗戦の昭和二十年雨の教室」でした。上記の二首は私も選びました。私の歌は「戦場の二月のなみふる地底からへその緒のまま救われしいのち」。トルコシリアの大地震を詠み、5票でした。この日はまた、歌誌「月光」77号が発行されました。この号の特集は「第10回黒田和美賞 重信房

子歌集『暁の星』です。「面映ゆくうれしい号です。受賞後の作品三十首」「面白き旅語り 自由への星 Ⅲ」が載っています。これは高杉晋作の「面白きことも無き世を面白く」から批判的に着想し、私自身の誕生から今を詠んだ三十首です。「玉音忌臨月の母たじろがず子ら抱き疎開の博多を発ちぬ」から「穏やかな木漏れ日見上げ壊れ行く世界に立ちて如何に在るらむ」まで。そして私の受賞の言葉「虚心に湧き上がる思いを」や、歌人の大和志保さんが聞き手の月光インタビュ―「死と再生の歌―獄中での作歌生活二十二年」が続きます。どのように歌を作ら始めたのか? いろいろな歌を挙げながら語り合っているものです。そのあとは、黒田和美賞の選考委員の方々の論評が続きます。「暁の星」に素晴らしい情熱込め「抜」を書いてくださった福島泰樹主宰はじめ、選考委員の方たちの論評は鋭く暖かく、私が自覚し得ていない視点で論じられておりとても学習になりました。

選考委員の一人、岡部隆志さんは同じ



ユダヤ人入植者に焼き討ちされるパレスチナ自治区のパウル村

なくしていこう、脱原発を訴え続ける経産省前テント広場に敬意を表する、と述べたそうです。今も原発被害は収束しておらず、帰還困難区域が存在し、3万人を超える避難者がいる12年目、原発推進政策を戦争政策とともに進める岸田政権は安倍政権より酷いです。「G7議長

「世界」の名で米政府と親米官僚が描く道を次々と進んでいます。海外から訪れる人もおり、経産省前の脱原発広場は、貴重な歴史の証言の場となっています。
**世界の動きを見つめながら
板垣雄三先生講演会で**
パレスチナ情勢はますます悪化し、新政権になってパレスチナの若者や子供が毎日殺されて既に2カ月余りで死者は80人を超えたとの報道です。パレスチナ国旗に包まれた棺に続く群衆の葬式デモの映像がアルジャジーラ報道に毎日溢れています。ユダヤ人入植者がオリーブの木を切り倒し家を破壊し、軍と一体化して残酷な弾圧を繰り返す日常です。それでも飽き足らず2月26日にはパレスチナ自治区の中にあるホワラ村を数百人のユダヤ人入植者が襲撃し、パレスチナ人の30の家に放火し100台以上の車を燃やし6人の村人を殺し、400人近い村人に重軽傷を負わせました。この行為は、1938年11月にドイツ各地で起きた反ユダヤ主義のユダヤ人迫害暴動「水晶の夜」を思い起こさせます。このユダヤ人

入植者のホワラ村襲撃を「パレスチナの『水晶の夜』だ」と呼んでいる人々もいます。この攻撃のあとイスラエル兵は入植者と共にダンスまで踊るありさまです。イスラエル側は物理的には優位にありますが、パレスチナ人たちは生存の闘争の正義の圧倒的な信念のもと、殺されても殺されても抵抗を戦いつづけています。このネタニヤフ新政権は、パレスチナ人ばかりか、イスラエル人からも糾弾に直面しています。ネタニヤフ自身の免責特権をも狙ったとみられる「司法制度改革案」を提起したことで、1月からデモが始まり、3月には50万人以上が参加する大規模な抗議集会が続いています。この改革案には、最高裁の法律審査権を大幅に制限し、判事の任命に政府の意向が反映され、三権分立の原則や司法府の独立を著しく損なうという反対意見が巻き起こりました。特に法曹、軍・治安の上層が危機感を持ち訴えたので、社会全体に反ネタニヤフ政権デモとして広がりました。軍を含む異議申し立ての職場放棄で戦闘態勢にも影響が出ているとのこと

福島原発事故のあった年の9月以来、脱原発を求める市民たちが経産省の前の空き地にテントを張ってテント広場を造りました。以来、権力の妨害、国家による訴訟など曲折を経つつもずっと365日、通産省前で今も、脱原発を訴え続けています。そこは、交流の場となり、福島その他全国各地から原発に反対する人々が訪問し交流し、励まし合い情報交換して脱原発を訴えてきたのを私は獄中で「テント日誌」などを読み知っていました。だからいつか、通産省前のテント広場に行ってみたいと思っていました。友人の僧侶から、3月9日にテント広場で祈禱の集いがあると誘われました。「日本祈禱団四十七士」またの名、「呪殺祈禱僧団四十七士（JKS47）」は、毎月経産省前で脱原発行動に連帯し祈禱会を催しています。この僧侶たちは「死者が裁く」という立場で、東日本大震災、福島島の被曝など国家の政策によって殺された無念の人々や敗者と共に立ち、国家を告発してきました。この日本祈禱団は1970年代に公害病の原因である汚染

物質を垂れ流す企業への抗議のために結成された「公害企業主呪殺祈禱僧団」を継承して再結成したものだそうです。活動理念として戦争法案廃案、軍備増強反対、岸田政権退陣、原発再稼働・延長危険使用阻止を訴えています。僧侶で劇作家の上杉清文さん、僧侶で歌人の福島泰樹さんから47人の方々の祈禱です。今年は3・11から12年目に当たり、13回忌でもあり、私も経産省に向かいました。霞ヶ関の12番出口を上ったところが経産省本館です。すでに僧侶たちが鎮魂の式の準備を始めているところで、旧い友人でこの広場を創設された三上治さんもおられて挨拶を交わしました。直ぐに原発関連企業主、行政の責任者に呪殺祈禱をもつて抗議する催しが始まりました。僧侶の一人は「死者が裁く」と書いたたすきを掛けています。開会のファンファーレのあと読経が続き、その後、表白文「鎮魂―死者が裁く」が厳かに読み上げられました。3月10日は東京大空襲から78年目でもあり、東日本大震災とともに殺された者

たち、無念の犠牲者を深く悼み政府への厳しい批判を繰り返して述べていました。さらに太鼓を打ち鳴らし死者の鎮魂と抗議の読経が続きます。
祈禱中の歩道脇にタクシーがひっきりなしに止まり、官僚たちが祈禱団に一瞥もせず経産省本部を出入りする姿を見ながら、原発で巨額の税金を費消したばかりか税金が今も無駄に使われているのだらうと思わずにはいられませんでした。政府は旧原発施設の延長を決め、汚染水を「処理水」などと変名して海に流す準備をし、3・11などなかったかのようにウクライナ、ロシア、中国、北朝鮮と言いつつ戦争―軍事大国化の道と一体に再稼働を進めています。
3・11当日には経産省本館前に約100名が集ったとのこと。三上さんの開会挨拶から、アピールとコールと音楽で脱原発を訴え、福島は終わっていない、汚染水を海に流すな、と岸田政権の原発推進政策を糾弾したそうです。大震災当時に首相だった菅直人議員や福島瑞穂議員も発言し、日本ばかりか世界の原発を

日曜金曜日 週刊

編集委員 雨宮処凛 宇都宮健児 想田和弘 田中優子 崔善愛 中島岳志 本多勝一

定価600円(税込)

4月の特集予定

こころがヘンだよ?? 安倍晋三回顧録 河野洋平 インタビュー

半年 24冊 12,426円(1冊82円お得) 1年 48冊 24,343円(1冊93円お得)

*月額自動引落し(1冊70円お得)もあります。

書籍のご案内

沖繩は 孤立していない 世界から沖繩への声、声、声。 乗松聡子 編著

お申し込みは 0120-004634 0120-554634

発送開始後の途中解約には応じかねます。(株)金曜日http://www.kinyobi.co.jp/

結局・欧米中心主義の末路だ」と話しました。こうした文脈の中にサウジアラビア・イラン・中国の共同の動きもあると語り、国際秩序の不正義の根拠がイスラエルのみでなく、米欧政府の二重基準を私も批判してきたように、パレスチナ連帯を訴える人々の見方の基本がそこにあると述べています。

大局も日本の将来像もないと批判し、平和国家・文化国家日本の目標に即した戦略をどう描くかこそ今問われていると訴えました。その後の懇談でも現在の日本を語り、世界を語り、大いに学習意欲が湧いた一日でした。

し、その後歌人たちと語り合う楽しい時間もありました。友人の水田僧侶が呼びかけて、遠山美枝子さんの命日に大学時代の友人と墓参にも行きました。暖かい春の陽気の中、横浜の近くの駅に降り立つのは半世紀以上ぶりです。1970年以来会っていなかった友人と懐かしく挨拶を交わすと、忽ち当時の遠山さんもいた、喧騒に満ちた大学時代の話が溢れてきました。

3月15日

また3月10日、中国の仲介によってサウジアラビアとイランは国交正常化に合意したという三者の共同声明が発せられました。同じころ米国シリコンバレー銀行の経営破綻が明らかになっています。バイデン大統領は2月にウクライナを訪問し、ウクライナ市民の犠牲を顧みず戦争の継続をゼレンスキーと共に宣言していました。この間の動向を見ても、世界は、米国の思惑に沿って進んでおらず、戦争の継続は、ウクライナ、ロシアのみならず欧州やアフリカ、米国までで危機を深めており、現世界は、即時停戦こそを求めています。

めると、第一は現在のウクライナの戦争の構造から世界をとらえた問題設定です。「ロシアのウクライナ侵略」という構図をめぐる世界の分裂について語り、この「ロシアの侵略」という構図自身が米国の設定である点を指摘しました。1969年の西ドイツ・ブランド首相の東方外交、冷戦終結後の「欧州安全保障協力機構」の歴史を語り、それを踏まえ2014年9月5日のミンスク議定書、15年2月12日のミンスク合意2を出発点の基本とする問題設定にこそ正当性があると語りました。オバマ政権時のバイデン副大統領、ヌーランド國務次官補コンビが戦争の構図を作り上げてきて、今もその役割は変わっていない点を論証していました。私も去年出版した「戦士たちの記録」の中でウクライナ問題に関して、共通した米批判を述べています。

件を起こしました。ロシアの天然ガスを欧州に送るためのこの海底パイプラインを米国とトルウェー軍と共同で爆破したことが暴露されています。この失態を取り繕おうと米側は情報攪乱に躍起ですが、こうしたことを調査も報道もしない、日本のメディア論調を批判しました。第二に「現在は世界秩序の綻びと解体の進行にあり、18〜20世紀を彩った欧米中心主義の時代の終わりを示している」という指摘です。西洋のキリスト教の反イスラーム・反ユダヤ主義が作り出した植民国家イスラエルが欺瞞の出発点であり要にある。戦後すぐ連合国のつくった国連は、シオニストのために、ユダヤ国家とアラブ・パレスチナ国家の2つの国を作るとパレスチナを分割し、ユダヤ国家イスラエルができることアラブ・パレスチナ国家は無視して歴史に捨て去り、イスラエルのみを「民主主義国家」として国連加盟を認めた。ここに戦後国際秩序の欺瞞があり、その延長上に現在の欧米中心主義の危機があると語り、「今我々が目撃しているのは米帝国の一国覇権の



救援連絡センターの総会

口実に危機を煽って原発復権を狙っている岸田政権。汚染水を「処理水」として海に流す、「日本は原子力政策を決してやめることはない」と小出さんは断言し、原子力を止められない本当の理由はどこにあるのか、自民党石破茂議員の発言を

石破氏曰く原子力発電というのは、そもそも原子力潜水艦から始まった核政策とセットである。日本は核を作ろうと思えば、一年以内に作れるし、それは1つの抑止力である。本当に原発を放棄して良いのか? 「私は放棄すべきとは思わない。なぜなら、日本の周りにはロシアであり、中国であり、北朝鮮であり、そしてアメリカ合衆国であり、同盟国であるか否かを捨象して言えば、核保有国が日本の周りを取り囲んでおり、そして弾道ミサイルの技術を全ての国が持っていることは決して忘れるべきではありませぬ」と。

小出さんは、自民党の政策である限り、日本は決して核を放棄しない、原発政策が続くと喝破し、岸田政権になって、それがますます当たり前のように入進んでいる、と語りました。

小出さんの根本思想は「核は差別の象徴」であり、差別を許さないという考えに基づいています。それは原発だけにどまらず、今でも彼は自分の住む地域で「原発即時全廃 戦争一切禁止」と書いて

て掲げ、一人でスタンディングを行っているそうです。

また、この総会には、三里塚闘争の2月15日強制執行の弾圧との戦い、袴田巖さんの再審決定の報告、星野さんの国賠訴訟、横浜刑務所での医療改善の要求や5月G7サミットの予防弾圧など、現場で闘い続けている人々が登壇し訴えました。こうした人々の声を直に聞く機会を持つる自由のありがたさを改めて感じた総会でした。

私も挨拶に立ち、69年の初の逮捕時に暗記していた救援連絡センターの電話5911301(ごくりいみおーい)に連絡すると弁護士が来て下さりとても安心したこと、また2000年11月に逮捕された時にも同じ電話番号を刑事に伝えると2時間もしないうちに弁護士が駆けつけて下さったことなど、救援連絡センターの弁護士や山中さんを始めとするスタッフの方々から受けた支援と励ましに感謝の思いを述べました。

岸田政権の戦争政策は「治安」の名で弾圧をますます強化しており、センター

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

第7回



重信房子

救援連絡センター総会に参加して

4月1日、救援連絡センターの第19回定期総会に参加しました。救援連絡センターは逮捕された市民や獄中者を支援する団体で、1969年に物理学者の水戸巖・喜世子夫妻らによって設立されました。二大原則は「国家による、ただ一人の人民に対する基本的人権の侵害も、全人民への弾圧とみならず。国家の弾圧に対しては、犠牲者の思想・信条、政治的見解を問わず、これを救援する」というものです。この原則に基づいて既に半世紀

以上も運営されてきました。

この日は私も総会の後半で挨拶をするよう要請を受けていました。今年の総会は、小出裕章さんが記念講演をされることで、それも聴きたいと思いました。総会には、各地の運動、闘いの現場から130名を超える方々が参加していました。

小出さんの講演のタイトルは「原発は滅びゆく恐竜である 水戸巖さんの背中を追って」です。この「原発は滅びゆく

恐竜である」は、水戸巖さんの反原発を訴える本のタイトルです。小出さんは、「私は多くの方々から教えを受けました。その中でも師と呼ぶ人は水戸巖さんです。人生の生き方を教えられました」と、原子力の平和利用を夢見て学び始め、その嘘を知り、落胆の中で、水戸さんが切り拓いていた反原発の活動に参加した日々を語りました。

小出さんは、世界最大の地震大国日本に一つの原発も作ってはならないと、具体的な科学的根拠を示しながら語られるので圧倒される説得力です。原発が安全ならなぜ消費する都会でなく過疎地に作られたのか? 国も電力会社もその危険を本当は知っている。「日本で運転された57基の原発はすべて自由民主党が政権を取っているときに許可された。電力の恩恵は都会が受け、危険は過疎地に押し付けられた。こんな不公平こんな不公正は初めから認めてはいけない」と。

地球上のウラン資源は化石燃料に比べて数十分の一しかないのに原発が持続可能であるはずもない。ウクライナ戦争を



日比谷での榎森孝雄さん追悼

戦った人々がどのように残酷な暴力と迫害の下に暮らしているのか、隠し撮りカメラがとらえ、世界に告発した戦いの記録です。当時ライブチヒ国際映画祭で金賞を受けたものを駐日パレスチナ事務所が日本語版に再編し、板垣雄三先生が解

説している映画です。私たちがパレスチナの仲間と共に「占領下のパレスチナ人民は武器を取って抵抗する権利がある」と正当性を訴えてきた歳月を振り返りながら、この映画を通して「抵抗権」について考えさせられました。私の公判で証言に立ったライラ・ハリドも、占領下にあるパレスチナ人は、武器を持って抵抗する権利が国連・国際法で認められている、と訴えました。1948年に国連総会で採択した「世界人権宣言」には「抵抗権」という言葉は直接使っていないけれど「人間が専制と圧迫に対する最後の手段として反逆に訴えることがないように法の支配による人権保護」を謳っています。それを継承してさらに国際人権規約第一条は民族自決権を謳っています。それを根拠として占領下人民の不服従、自衛武装手段をもっても不服従を貫く抵抗の権利があり、それこそが人権を自らのものとする自由と生存を貫く道だと認知されていました。今では、「世界人権宣言」に基づく人民の抵抗権すらも時代と共に「テロ」にす

り替えられてきたのを実感します。パレスチナばかりか、占領に抵抗するウクライナも、また日本政府の憲法違反の戦争政策に対する抵抗も人としての権利です。日本では「アモは犯罪じゃないのか？」と尋ねた大学生がいたという話を思い出しながら、「世界人権宣言」の抵抗の権利の普遍的復権を考えてみる時だと思いました。国内国際的な反戦の連携が歴史を土台にして育って欲しいと願いながらそう思います。

「土地の日」に友人を追悼する

2002年のこの「土地の日」、友人の榎森孝雄さんが、パレスチナの戦いに連帯して日比谷公園のカモメの噴水の傍でイスラエルに抗議の焼身自決をされました。この時期はアメリカで起きた9・11事件を利用してイスラエルのシャロン政権が「アラファトもアルカイダ、テロリストだ」と、パレスチナの大統領府を破壊して激しい攻撃を加えていた時です。榎森さんは、1972年にPFLPの指揮下、義勇兵として戦った日本人戦士

は二大原則に基づく人権の砦としてこれから更に不可欠な存在となるのを実感します。この大事な活動が限られた人々の尽力によって支えられていることに感謝し、もっと多くの人々に理解されて支援が広がっていく必要性を痛感します。

抵抗権について考える

予想したように、パレスチナ情勢は日々悪化しています。中東では3月23日からイスラエルのラマダン（断食月）が始まり、イスラエルによるイスラームやパレスチナ人への冒瀆や暴虐に抗議する戦いは激しさを増さざるを得ません。12月にネタニヤフ政権が発足して以来約100人のパレスチナの子供、少年、青年たちが殺され、負傷者の数はその何倍をも数えています。

4月5日にはラマダンの礼拝中、イスラーム聖地の東エルサレムのアルアクサ・モスクにイスラエル軍が突入してモスクを破壊し、抵抗した350人の礼拝者を拘束しました。ハマスは、これには黙ってられないと手製ロケットで抵抗

すると、待ってましたとばかりイスラエル軍はガザ空爆を開始し、6日にはレバノン南部からも抗議のロケット弾がイスラエル北部に打ち込まれ、イスラエル軍はレバノンにも空爆を開始しています。入植者の暴力に抗議してパレスチナ側の反撃も拡大しています。「宗教シオニズム」党首のモトトリツチ財務相は「大イスラエル」の地図を掲げて「パレスチナ人など存在しない」「歴史も文化もない」などと国際社会に向かって言い放ち、やりたい放題です。ネタニヤフ政権は「司法改革」では一時的に引き下がるを得ませんでした。その窮地をパレスチナ弾圧にすり替えて政権の活路を見出し、さらにアパルトヘイト・民族浄化政策を拡大中です。

米国政府の二重基準によってイスラエルは占領も占領地入植も、核兵器保持も護られてきました。戦後秩序の不正の象徴としてイスラエルは今も優遇され続けています。

丁度私は「土地の日」のドキュメンタリー映画を鑑賞しました。パレスチナ人

は、1976年3月30日に起きた事件を「土地の日」として歴史に刻んでいます。この日は、イスラエル政府と軍によって繰り返される土地強奪に抗議してイスラエル内のパレスチナ人が初めて組織的に立ちあがった日です。

多くのパレスチナ人は、イスラエル建国によって生まれ育った土地を追われ、難民となりましたが、ガリラヤ地方のパレスチナ人は自分たちの土地に留まって「二級市民」の暮らしを強いられ、いまもそのガリラヤ地方のパレスチナ人が、この日、初めて一丸となって整然とストライキを持って戦いを開始したので、イスラエル軍の激しい弾圧に6人の住民が殺され、何百人もの負傷者を出しながらも生存をかけた戦った日です。自分の土地を手放さない、占領を許さないこの戦いは、追放され難民生活を強いられていたパレスチナ人を含む全パレスチナ人の戦いの歴史の日、戦いの決意の日となりました。

私の親た映画「土地の日」は1980年に作られたものです。イスラエル内で

の仲間の一人でしたが、パレスチナ解放闘争に連帯し、イスラエルの虐殺に抗議し戦死しました。それ以来、「土地の日」には、友人たちが檜森さんの追悼を日比谷公園カモメの噴水の傍らで行ってきました。当時獄中にいたわたしは今年初めて参加しました。

娘のメイは、2001年日本に初めて帰国した後、檜森さんにお世話になったことがあると言い、2人で追悼の集いに向かいました。公園の桜がもう盛りを過ぎて散り始めています。半世紀以上を過ぎて再び日比谷公園を歩きながらメイに、私たちがかつてデモや集会でこの地を埋めるほどの人々と共に集まった話をしました。

檜森さんの死から既に21年を数えますが、20人近い人たちが集まっていました。カモメの噴水の傍らのオリブの木の根元にパレスチナ国旗と檜森さんの写真を配し、友人たちが挨拶し合いながら献杯し、順番に焼香しました。

「檜森さん、今、私は生きてここにいます。貴方と話せないことがとても残念です。

「私たちの時代」出版と対談

んだ新酒を呑み、「30年もの」のウイスキーの差し入れもあり30人位の参加者たちが思い思いに語り合いました。どこに行っても学習できることを楽しんでいきます。

「私たちの時代」という自著を準備中です。これは、獄中にいた時に書いたものです。もし生きて獄から出られない場合、ステレオタイプの「重信房子」ではなく、等身大の自分がどのように生きてきたのか、これまで支えて下さった友人たちに伝えたいために書いてきたものです。これがブログに一部掲載されたのがきっかけで、太田出版から「私たちの時代」という題名で5月に出版されることになりました。太田出版は山本直樹さんの漫画『レッド』を丁度再刊したところで、両著者の対談を「情況」誌に載せるとのことです。山本直樹さんと対談をしました。

「20歳の時代」のゲラを山本さんが読み私も再刊された『レッド』全4巻を読んだので対談に臨みました。山本さんは獄に面

す」と語りかけながら私も焼香しました。「檜森が逝った時も桜吹雪だったなあ」と親しかった友人が眩いて、皆で桜散る青空を見上げました。

その後交流会で再び献杯と乾杯を繰り返しながら、若い人たちや古い友人たちと檜森さんがそこにいるように楽しく語り合いました。闘っている人たちは仲間を忘れない。セクトや歩みが違っても、畢竟人間同士としてこうして出会えるのが本當の仲間なんだなあと実感する追悼の集いでした。

明大土曜会で

4月の明大土曜会は、3月の沖繩連帯行動の報告です。88歳の土屋源太郎さん（1957年7月の砂川事件で、伊達裁判長から無罪判決を受けた元被告）を団長に、現役の学生や後期高齢者、現役労働者など「老学青年共同」の20名近くが沖繩に行きました。

辺野古新基地を作らせないオール沖繩会議が辺野古のキャンプ・シユワフ前で市民集会「第36回県民大行動」を開いた

会に見えたことがあります。その時に私が『レッド』の感想として「革命運動はもっと楽しかったんですよ。あの時代を楽しい時代として書いてください」と発言したのを山本さんも覚えていて、「私たちの時代」のゲラを読んで、漫画『レッド』は69年東大闘争から始まっているけれども、ちょうど67年68年が楽しい時代で東大闘争を経て、それが下降していく時代だったのが分かったと言いました。山本さんは、『レッド』の95%は事実に基づいて書いているそうです。『レッド』はノンフィクションなのでしようが、描く素材となった話や文章の切り口の皮相な「事実」のせいや、私にはフィクションに感じられました。『レッド』を読むと恥ずかしいという思いが込み上げたと私の感想を述べました。革命というものがこうした皮相な姿と観念の二元化として描かれれば描かれるほど、その思想の漫画性が人口に膾炙されてきたことに、自分の問題として問えば問うほど、改めて恥かしいと思わずにはいられないのです。

日、明大土曜会も参加して団長の土屋さんが連帯の挨拶をしました。土屋さんは、当時を振り返りながら、今、全国の米軍基地専用施設の約7割が沖繩に集中していることについて「本土で基地反対運動が高まり、その結果、米軍の沖繩への移駐が生じてきた。（沖繩と当時我々が共闘できなかった点で）申し訳ない思いがある」と述べて、「今日の経験を持ち帰って共有し、沖繩と連帯して運動を続けていく」と述べたとのことです。

土屋さんは、明大の先輩で1957年当時都学連委員長だったので、闘いの経験を生かすことがどんなに重要かをみんで語り合い、今も闘い続けている「伊達判決を生かす会」の国賠訴訟も明大土曜会で支えて行こうと語り合いました。

この日は他に、政治・社会・環境などについて若者が今、どんな問題意識を持っているかの報告や、介護問題を重視する地方議員を増やすためのアクション「介護と地域」への支援の呼びかけなどが討議されました。その後の懇親会では、明大土曜会のメンバーが杜氏として仕込

連合赤軍事件はなぜ起こったのか、指導者の人格は組織思想に影響するか否かなど、武装闘争に対する考え方を語り合いました。私は、権力との攻防の中で武装闘争の主張が登場してきた背景を語りながら、私たち赤軍派の根本的な誤りは、失敗を繰り返しながらも武装闘争路線を取り下げることでできず、それに万能の解決を求め続けたこと、そこから全ての問題が派生したと考えていると述べました。武装闘争を自己目的化し、「武装闘争を担える人間を作る」といった、転倒した革命の担い方となり、武装闘争を前提とした闘い方を脱却出来ず、無理に無理を重ねた結果が連合赤軍事件に至ったと思うからです。

竹下夢二を思わせる懐かしく爽やかな山本さんの絵で『レッド』の悲惨なストーリーも救われる思いがします。こうして対話することは自己内省を對象化できてありがたいと実感しながら参加しました。もう少しで、自由になって1年になるのですが、頭の方のリハビリはまだまだ必要です。

（4月15日）

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

第8回

中重信房子



再び5月を迎えて

半世紀ぶりの投票へ

花々が道々に咲き揃い、もうすぐ5月を迎えようとしていた4月末。去年のその頃は22年の獄中生活から社会に復帰する思いでワクワクしていました。

獄というところは囚人に服従のみを強いる「ロボット化政策」で管理しています。自分で考えて行動することが違反であり、懲罰を受けます。その後遺症で、何をするのも指示待ちの癖が抜けな

いと、小さな投票用紙を貰いましたので候補者名を1名書きました。そして投票箱に入れます。そしてまたもう1枚紙をいただいた、今度は首長名を書きました。それを投票箱に入れると矢印は出口です。あつげなく投票は終わりました。ほんの5分もかからなかった気がします。簡単に拍子抜けした気分でした。

いまは投票率低下が言われますが、若者が投票しやすいようにネットで投票できるようにすることや、もっと言えば日本の未来を決める以上、私は白票ありの国民の投票の義務化こそ必要だと思います。国民の裁判員義務化をしましたが、それよりも、国政選挙の投票義務化の方が先にやるべきだと思つたものです。そして地方選挙では住民は国籍問わず投票権を持つことが公平でしょう。元首相の森さんが「寝ててもらった方が良い」などと不用意に述べたように、国民を徹底的に非政治化してきた日本。庶民は利口な分、取って投票しない面もあります。全国民の投票義務化によって投票と政治

たり前の行為でも、初体験に戸惑うことがあります。だから一つひとつ、間違いないか何度でも確認しないと不安で気が済みません。これも後遺症の一つかも知れません。

選挙もそうです。昔は選挙運動の応援やアルバイトをしたり、投票もしましたが、半世紀ぶりの選挙への投票は初体験のような気分です。

投票日や投票場所、時間や投票整理券を何度も確認しながら地方選挙の投票を待ちました。

投票日の1週間ほど前に、投票所入場整理券や選挙広報が送られてきました。様々な推薦のピラも郵便受けに届きます。選挙広報を隅から隅まで読むのも初めてです。読んでみると、地方選挙のせいか、どの立候補者の主張も暮らしが基本で、子供の教育、健康長寿、防災介護、地域の環境改善、働く世代の格差解消などそれぞれです。どの候補が当選しても貢献してくれそうなのが書かれています。地域は、それぞれの地域に合った政策の実現ということが主なので、私

はやはり国政と結びつけて選ぶことにしました。少しでも反自民勢力を応援したいからです。

投票日は、4月23日午前7時から午後8時と書かれています。この日は用事もあって、期日前投票にしたかったので、どんな手順で投票が行われるのかわりたかったので、投票日に投票所で投票することにしました。朝早めに家を出て7時少し過ぎに、地域の投票所につくと、職員が万全の準備で待ち構えている風情でした。ずいぶん並ぶのかと思つて着いたのですが、国政選挙がないせいなのか投票者が2〜3人いただけでがらんとしていて拍子抜けです。並ぶこともなく、受付で投票所入場整理券を見せました。

パソコンで確認して「ご本人の方ですね」と言われ「はいそうです」と言うとう身分証提示も求められず「結構です」と促されました。あれ？これでは替え玉投票が簡単にできるなあと思わず思いました。それから矢印の方角へ進み、もう一度整理券を見せてパソコンでチェックしていました。そして区議会議員の投票で

すと、小さな投票用紙を貰いましたので候補者名を1名書きました。そして投票箱に入れます。そしてまたもう1枚紙をいただいた、今度は首長名を書きました。それを投票箱に入れると矢印は出口です。あつげなく投票は終わりました。ほんの5分もかからなかった気がします。簡単に拍子抜けした気分でした。

いまは投票率低下が言われますが、若者が投票しやすいようにネットで投票できるようにすることや、もっと言えば日本の未来を決める以上、私は白票ありの国民の投票の義務化こそ必要だと思います。国民の裁判員義務化をしましたが、それよりも、国政選挙の投票義務化の方が先にやるべきだと思つたものです。そして地方選挙では住民は国籍問わず投票権を持つことが公平でしょう。元首相の森さんが「寝ててもらった方が良い」などと不用意に述べたように、国民を徹底的に非政治化してきた日本。庶民は利口な分、取って投票しない面もあります。全国民の投票義務化によって投票と政治

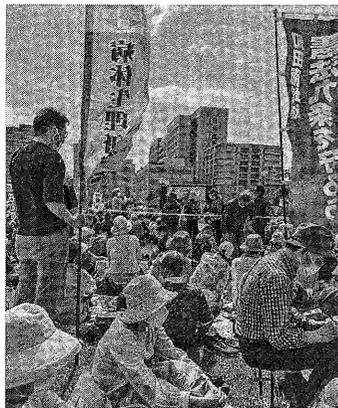
が結び付き、様々な意見が結集されれば、

賛成ではないが「おかみ」の言うことになんとか従う、という風潮を打ち破り、みんなが選択する日本にやがてなっていくに違いないと思います。

朝の少し冷たい空気の中、投票も私にはりハビリだなど思いながら国民の投票義務化を夢想し期待する気分になって戻りました。

憲法記念日に

5月3日憲法記念日に、私は憲法集会に市民の一人として参加しました。学生時代には「憲法は実際には日米安保条約の下に置かれていて国の最高法規というのは欺瞞だ。護憲などと言っても意味がない、もっと根源的変革、革命こそ必要だ」と憲法問題を軽視していました。でも憲法を「押し付けた」と言われる米國も日本政府も憲法を守るところかないがしろにしてきたことを、もっとこちら側が真剣に捉える必要がある、と1980年代の武装闘争の総括の中でわたし（たち）はとらえ返しました。人々が主体となる、地域に根差した日本の変革を考え



有明防災公園での憲法大集会(筆者撮影)

開会挨拶。それから清末愛砂さん(室蘭工業大学教授、憲法学)と泉川友樹さん(沖縄大学地域研究所特別研究員)らのスピーチが始まりました。

清末さんは、パレスチナで激しい弾圧の中でも幸せを育み、生きることの大切さを学んできたことから語りはじめ、進行する日本の「新たな戦前」は、足元の小さな幸せを支える人々の尊厳を否定すると訴え、職場でのさまざまな差別との闘いを報告していました。

更に立憲民主党、共産党、れいわ、社民党などの政党を代表する人々が熱い連帯を語りました。彼らは、憲法9条も「専守防衛」も投げ捨てる「戦争国家」

た時、平和主義、人権、主権在民の「憲法三原則実現の徹底化」を政府に求め続ける戦略的意義もまた捉えました。振り返ってみると、日本では、憲法違反の権力と、それに抵抗し変革を求める人々の攻防が必要になって日本の歴史が動いてきたと言ったこともできると思います。

これまでなし崩しに憲法違反を繰り返してきた自民政権は、ここにきて憲法のくびきによって壊せずにきた日本の「専守防衛政策」を、米国の要求に応えて根本的に覆っています。この世界の激変期、戦争、軍事大国化を急ぐ日本に、反対する反戦平和を求める人たちがどのような思いでいるか、私も現場に行つて学び、その思いに近づいてみたい、と憲法集會に参加しました。

有明防災公園で行われた今年の憲法大集會は、「あらたな戦前にさせない! 守ろう平和といのちと暮らし」2023憲法大集會」というタイトルで開かれました。

友人から「昔と違って集會後のデモはゆつくりだよ。暑くなるので、飲み水や

敷物、軽食も準備してくると良い」とアドバイスされて、半世紀以上ぶりの集會参加です。デモも参加できるかもしれないと神妙な思いとワクワクする楽しみとそんな気持ちで私は早めに有明公園に向かいました。

一緒に行く友人たちのビラまきの都合もあつて、私も11時前に現地に着きました。国際展示場の駅から有明公園のほうに向かうと、もうすでに多くの人たちが熱心に競うようにしてビラを配っていました。ああ、60年代に、私も日比谷野音の集會に来る人々に新聞を売ってカンパを求めたりしたなあ、と思いながらビラを大切に受け取りました。最初に受け取ったのは「今こそ停戦を」とウクライナ停戦のためにクラウドファンディングで意見広告を呼びかけるビラです。様々な著名な方々の写真がウクライナ停戦を求めて寄付を呼びかけているものです。

それから大量のビラ配りのトンネルをくぐるようにして先へと進むとゼッケンを付けた革マル派のビラと新聞配布。その先は、沖縄の旗、九条改憲阻止を訴え

化が今の岸田政権の正体だと政府を批判し、日本の先制攻撃が報復攻撃となる日本国土の危険性を指摘し、軍拡財源を問題視し、軍事栄えて一人ひとりがないがしろにされる日本にしてはならない、「新たな戦前」にさせてはならないと訴えました。ことに2022年12月、岸田政権が閣議決定で決めてしまった「国家安全保障戦略」「国防衛力整備計画」の三文書の戦争準備の「防衛力強化元年予算概要書」による軍拡路線を阻止しようと訴えました。そして参加者みな一体になった、反戦平和行動をと呼びかけていました。昔とまったく違うのが登壇する方々の多くが男性ではなく女性だったことです。会場参加者も女性が多い。すごくいいな、とうれしくなりました。これまでコロナ対策で自粛したり、十分に集まれなかったのですが、今年は違いました。2万5000人以上がこの集いに参加していました。

今、日本は米同盟軍の前線として、先兵として、滅亡への坂道を転落しかねない過渡期にあると私も思います。その

る幟とビラ、立憲民主党、共産党、社民党、れいわ、新社会党などの政党の旗が掲げられ、平和、命と暮らしを守るために改憲をさせないと訴える人々のビラがどんどん渡されます。会場に行く人々は、そのビラを大事そうに抱えて、多分家に戻ってから勉強しようと思うのでしよう。抱え切れないほどもらってカバンにしまつたりしていました。当初早すぎたせいで5000人位に見えた参加者は開催時刻の12時半に近づくにつれてひっきりなしに増え、数え切れない幟がひらめき、様々な地域や会社、労働組合、学生や地域の9条の会、反戦の会などの色とりどりの鮮やかな幟が公園一帯を埋め尽くし風にひらめいています。昔のような大きな旗は有りません。乱鬼龍さんが「反戦の覚悟を迫る風強し」という一句を幟旗に記して通りました。署名を募っている人もいます。老若男女の多くが芝生の会場にひっきりなしに進んでいきます。

メインステージでは、12時半からオーピングでベーツソングの歌が演奏され、13時開会。5・3憲法集會実行委員会の

分みんなの切実な危機感と闘志が胸に響きます。

集會場の芝生に座つて皆の声を聴きながらなんだか心が豊かになり、勇気づけられます。こんなにたくさん「新たな戦前にさせない」と訴える同じ考えを持つ人たちがいる、そう思うだけでなんか闘志が湧きます。現実はどういう声を無視して進んでいるのですが、集會はやっぱりいいものです。

周りを見回すと色とりどりの幟旗がはためいていて、暑い日差しの中で様々な方々の訴えに熱心に拍手し聞いています。子供も一緒の家族もいます。どの政党や市民運動代表も、危機感を持ちながらも希望を探そうとスピーチしているのがわかって、みんなと一緒に私も熱心に拍手しました。

「私たちは改憲発議を許さず、憲法をいかし、平和といのちと暮らしと人権を守ります」などの集會宣言の後、ゆつくりと進むデモにも加わりました。デモの隊列の進む海沿いの一角に大勢の警備がいましたが、そこには九条変えろと訴える

勢力がデモ隊の邪魔をしようと批判し怒鳴っていました。

「G7議長国」を掲げてますます米政府戦略の僕として戦争政策をつき進む自民党政権。「核廃絶の砦ヒロシマ」を、「G7・核抑止のヒロシマへ」と、ヒロシマの意義を変えようと画策している岸田政権の戦争政策を何としても許してはならない、と思いつつデモの一人となって歩きました。

「伊達判決を生かす会」 国賠訴訟の証人証言公判へ

入管法の改悪案を何としても阻止しようと、多くの心ある友人たちが連日国会や高円寺などの集会やデモなどで訴えています。ウイシユマさんへの人権無視の過失被害が響いて、2年前に入管法改正案は見送られたのですが、今回、難民申請中でも日本政府の意向で母国に送還できるとする改悪のまま入管法改正案が5月9日衆議院を通過しました。

友人たちから集いに誘われながら参加できませんでした。でもこの明大土曜会で支援している、「伊達裁判を生かす

会」の国賠訴訟は原告の土屋源太郎さんと5月22日の公判傍聴を約束していました。伊達判決とは、1950年代の砂川米軍基地拡張に反対した被告らに対し、一番の伊達裁判長が1959年12月「日米安保条約と米軍の日本駐留は戦力にあり憲法9条違反」と断じ、被告らが無罪とした判決です。当時この伊達判決に対し権力側が控訴審を飛ばして最高裁で差し戻し、被告らを有罪として罰金刑を科したのです。

当時、大多数の国民の反対に直面する中で安保改定を目論んでいた米日支配層は、「日米安保憲法違反」判決に大慌てで駐日米国大使、最高裁判所長官らが密会して伊達判決取り消しを図ったことが2012年日本の研究者の求めた米公文書開示で明らかになりました。それを知った元被告らが、日本の公文書開示と再審を要求して立ちあがりしました。最高裁判所長官ら当時の国側が憲法37条の公正公平な裁判に違反していると今回国賠訴訟で国を相手に闘っているものです。今回は証人として元外務省職員の子孫崎

出所1年を振り返る

既に5月を迎え、獄を出てから1周年を迎えます。早いものです。出所後、体調を崩し9月の癌の手術を経て10月に入所してやっと医師のOKが出てそろりと自由を味わい始めました。

何といつても友人たちの温かい励ましと支えが私のエネルギーを作ってくれま

した。出所時とその後の歓迎会の数々の交流、また関西の10月の反戦集会で私に挨拶の機会を与えて下さったことも、とてもありがたい社会参加の出発点となりました。ただ、まだ「異議なし」の友人たちとの交流の域を超えていませんし、会うべき人とも会えていません。体調は今年に入って良くなり、食事療法を続け無理をしないように気をつければ何とかやっつけいけそうです。

今、思い煩うのは、とてつもない勢いで戦争準備をしている岸田政権の前のめりの米追随がどうなるのかということ。G7サミットで象徴的だったように、ヒロシマで平和のための停戦や交渉の話をする事なくF16等の武器供与が相変わらずのテーマであったこと。首脳らが慰霊碑にそろって献花しつつヒロシマを利用してロシア、中国批判に終始しました。米国は国内危機やグローバル支配能力の弱体化を中国やロシアを敵として戦争に追いやることで新たな覇権の枠組みを作り上げることと延命を図ろうとしています。米の二重基準に基づく世界支配秩

序は、イスラエルの野蛮な支配を見れば明らかのように破綻しています。既に米国のヘゲモニー後退の中で、中国やロシアの支援で、サウジアラビア、イラン、トルコ、シリアと緊張緩和の新しい中東が目指されています。それはまた周縁化されてきたパレスチナの再構成を求めるでしょう。

残念なことに、日本政府は米国の戦略に組み込まれた道をますます深めています。日本は核廃絶のパラダイムではなく、「核抑止」の名で米国の傘の下にいる選択を続けており核戦争の最前線に国民を追いやる無責任な米追随の戦争政策を進めています。日本の将来は、まずもってアジア隣国同士の平和構築の努力なしには生まれません。戦争政策は、危機を拡大する道です。もう遅いかもしれないと危惧しながらでも「ウクライナ即時停戦」を訴え、公正な世界の再生に向けて反戦を訴える希望を持ち続けたいです。「もう貴方には時間がありませんからどんどん前に出て！」「住所もオープンにして顔

も晒してもっと積極的に！」と叱咤されることもありましたが、やり始めたら持続する責任を考えると体力的にも躊躇してしまいます。それでもパレスチナ連帯のナクバの5月です。イスラエル国家が暗殺を政策とするおぞましい殺害が激さを増す中、5月27日には、リツダ闘争51周年の集い、去年は出所後すぐ倒れて参加できなかったもので、今年は、スピーチを引き受けました。イスラエルのプロパガンダでないリツダ闘争、国際主義、パレスチナ・オスロ合意から30年の今年、新しい中東とパレスチナの今後などについて、わたしの活動を振り返りながら語るつもりです。また、土曜会でも自由を得て1年、何を考えてきたのかスピーチを約束しています。太田出版から自著『はたちの時代』が6月初めに出版されます。やりたいことはありますが、できることをほらほらと、が本音です。何もしていないけれど学び学びながら、一歩ずつ反戦と平和を戦いとる社会の一員として前へ進む決意を新たにしている出所1周年です。

(5月22日)



リツダ闘争51周年記念集会

私は今集会で娘のメイラ研究者たちから聞いた、ユダヤ系米国人のハワイ大学教授パトリシア・スタインホフさんの話も紹介しました。パトリシアさんは事件直後イスラエルに飛び、イスラエル側の報道を鵜呑みにして書いたが疑問があると、35年後のインタビューで語っています。「あれは、マスメディアとそれを情報源としているすべての人たち、私の初期の著作を含めて行われた誤ったイメージの一部です」と。彼女は交戦による犠牲を示唆し「まるで3人の日本人ボラ

ル報道を捉え直す」を第一テーマとしました。第二は私たちが実践した国際主義の総括的な報告、第三はオスロ合意の時代とそれが反故にされてきた現実を語り、第四は、中東の新しい動きとパレスチナ連帯についてです。70人ほどの集まりでしたが、PFLPや岡本公三さんから連帯の挨拶が会場に届き、釜ヶ崎などで活動している方々の連帯のスピーチもあり、活発な雰囲気の中で集会でした。なんとなく昔の新左翼の集まり風の記憶が蘇ります。去年はマスコミが溢れかえっていたそうですが、今年はそんなこともなく、私も久しぶりの集会を楽しみました。日本や米欧では、リツダ闘争は「全て日本人による大虐殺」というイスラエル側の報道で語られてきました。私は第一の報告でこのイスラエルの神話を正そうと思いました。当時からアラブの新聞は、戦時下の軍事空港を兼ねているリツダ(テルアビブ)空港への襲撃作戦の正当性を語り、アラブパレスチナ側の義勇兵とイスラエル兵との交戦を熱狂的に支持

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

第9回

リツダ闘争51周年記念集会

重信房子



出所からもう1年が経ちました。リハビリ日記も何回かで終わるはずだったのですが篠田編集長から続けるようにと誘われて続けます。私も書くのが楽しいです。

リツダ闘争51周年記念集会で

去年は出所してすぐ倒れてしまい、せっかくのリツダ闘争50周年集会には参加できずメッセージを送りました。今年は「ナクバ」(イスラエルの一方的な占領と

建国宣言に、パレスチナ、アラブは1948年5月15日を「ナクバ(大惨劇)の日」と定めた)から75年目、またPLOとイスラエル政府が相互を承認した「オスロ合意」から30年目です。

私は報告者として「パレスチナの現状と私たちの課題—オスロ合意から30年」というタイトルで4つのテーマで話しました。リツダ闘争集会に私は初参加なので、まず「1972年 リツダ闘争とはどのような闘いだっただのか? イスラエ

られた」と「仲間の誤射」として「交戦」を隠しました。裁判でも日本人の銃では最大120発の弾丸しかないのに空乗英が136発あるとしつつ説明を拒み、イスラエル兵の銃弾による犠牲者の疑問を封印しました。イスラエルは、レバノンの難民キャンプに報復空爆を繰り返し、国連、NGOの事実解明の調査も拒否しました。

ンテニアが全員を殺し、全員を負傷させたように語られたが、誰も調べなかつた」「なぜなら、事件後、現場を掌握していたのはイスラエル人だけであり、イスラエル警備兵によって誰かが撃たれた可能性を示すことは彼らイスラエルの利益にならないからです」と語っています。イスラエルの獄からジュネーブ条約に基づく捕虜交換により1985年に解放された岡本公三さんも空港を戦場とした戦いの犠牲者について次のように証言しています。「訓練した我々三戦士が、計画どおり警備兵を撃ち、慌てた警備兵が旅行客に向かって無差別に撃ち返した。その結果、戦闘に巻き込まれた人々が多数死傷した。我々が想定していた以上に、慌てたイスラエル警備兵のデタラメな射撃による死傷者が大半だった。しかし、今僕がそう証言しても、自己弁護にしかならない」と。イスラエルは事実を葬ったのです。



「はたちの時代」太田出版

ナのイスラエル占領に対する武装抵抗戦もまた正義であり、テロではありません。戦争継続を煽る米政権やG7サミットに反対し、ウクライナ即時停戦を訴え、今起きている難民選別や入管法改悪などに反対する。ウクライナからチャットGP T規制に至るまでG7が決定するのではなく国連に決定の場を戻させることが必要だと述べました。BDS運動(イスラエル占領下のユダヤ人植地で生産される製品の「ボイコット、投資撤収、制裁」Boycott, Divestment, and Sanctions: 頭文字をとってBDS運動)など、日本でも様々にパレスチナ連帯があります。私も少しずつ協同したいという思いを述べました。

パレスチナについて語れる場があり、真剣な聞き手の人々を前に、私は何故かなつかしさが込み上げていました。その後の交流会で半世紀ぶりの友人たちと再会の乾杯をしながら、リツダ戦士たちもそこにいる気分で高揚してしまいました。

初めての写真展

6月に入って、横木安良夫さんの写真展に行きました。新しく出版した「はたちの時代」の本の表紙は、写真家横木安良夫さんが学生時代の私を偶然撮影した写真をもとにイラストを描いています。由井りょう子さんが出版した「重信房子がいた時代」の時、この写真を発見してから自由に快く使わせてくださったので友人のライター島崎今日子さんに誘われてお礼方々写真展を見学することにしました。

場所は目黒駅から歩いて数分のところ。昔来たことがあるはずなのに、もう面影も失っている駅ばかりで、山手線に乗っても降りる駅を間違えないようにいつも緊張します。駅で島崎さんを見

つけた時はほっとしました。「わー、お元氣そう」と、彼女とも出所の日の取材以来です。少し風のある暑い中、深々と帽子をかぶって汗をかきながら写真展「追い越すことのできない時間 catch it if you can」の会場に着きました。

横木さんは待つていてくださって、挨拶を交わしました。お互い思わず見つめ合いました。彼は19歳、私は22歳の68年9月、同じ集会で時間を共にした人なんだなあと。そしてあの時彼がシャッターを切らなければこうしてお会いすることもなかったという感慨が押し寄せます。

会場を見回すと狭い空間に写真作品が並び、その空間の狭さに時間が息を止めるように感じます。写真が切迫取っているようにそれぞれの時間に連なる歴史を想像しながら「追い越すことのできない時間」というタイトルに、とっつも納得します。横木さんは出所の日も私の写真を撮って「週刊文春」に載せていましたが「いつか帽子とマスクのない写真を撮りたいですね」とおっしゃり、島崎さんが「専属写真家ね」と笑いながら3人のス

と私は聞きました。彼とその弟は建国のヒーローとされていますが、今ではユダヤ人を含む研究者らによって戦争犯罪人であったことが明らかにされています。イスラエル建国以前から後のイスラエル軍となるハガナ機関が、パレスチナの井戸にコレラ菌やチフス菌を撒いた生物兵器の開発、爆発物製造を主導した統括責任者であると後に暴露しています。パレスチナ民族浄化、イスラエル建国の功績で、大統領職に就く予定の男だとPFLPが話していました。彼はこのリツダ作戦で殺害され、彼と協同していた弟、エフライム・カツィールが73年から大統領になりました。

私はこうしたリツダ闘争の事実関係を去年の12月に毎日新聞電子版のインタビュで語りました。イスラエル大使はそれを読んですぐ、私のような「テロリスト」に語らせたと毎日新聞に抗議したので、毎日新聞は、即イスラエル大使の反論インタビューを載せました。その一方で、電子版の後に新聞紙面に載せる予定だった私の記事を載せませんでした。こ

うした日本のマスメディアの限界も私は話しました。イスラエル大使は、あたかも私がリツダ闘争に関与したように語りますが、私は当時の占領下人民の抵抗権の行使として正当なPFLPの作戦を支持しているのであり、日本赤軍が当時存在した訳ではありません。当時万単位のメンバーを持つPFLPの秘密作戦に、言葉も不十分なボランティア1年目の私が関与したくてもできるものではないとイスラエル大使の言を否定しました。

第二は、国際主義の歴史とフロントや赤軍派の「プロレタリア国際主義と組織された暴力」から世界党・世界赤軍・世界革命戦線の歴史と、アラブで闘う中で国際主義をどうとらえ返しながら来たのかを総括的に語りました。そして21世紀が「反テロ戦争」の名で戦争と難民の世紀となった現実に、国際主義の思想は今、何よりも目の前にある命をどう救うのかという実践的で多様なイデオロギーを脱した行動が、国際連帯として問われていると述べました。

第三に、オスロ合意の歴史を踏まえて、

第四に崩壊する世界と新しい中東についてどう展望し連帯するか?です。米国政府がウクライナの停戦ではなく戦争を煽るのも、非西欧の中国やロシアを敵とすることで米覇権による世界の再構成を企んでいるからでしょう。この結果、グロバルサウス、中東でも米国式でなく、多面的な文化のある世界を求める勢力が米政権と相対的独自の国家戦略を描き始め、サウジアラビアと中国の動きが新しい中東を開いています。この流れは、緊張緩和を求めるでしょう。その中でこれまで周縁化されてきたパレスチナには、どのような選択肢があるのか? 「一国解決案」、「二国家解決案」は有効なのか? アラブ国家との関係は? これらの展望や問題をもっと語り合いたかったのですが時間が足りませんでした。唯言えることはパレスチナ自身の統一が最大の力を造るということです。

私たちは米国の二重基準による支配構造を明らかにしながら国際連帯を育てようと話しました。ウクライナの占領に対する武装抵抗の戦いが正義ならパレスチ

ナップ写真を撮りました。帰路、島崎さんと明るい喫茶店に寄って、軽い食事をしながらおしゃべりを楽しみました。

島崎さんがフルーツサンドというものを注文し、私はチーズいっぱい何とかが合うて頂きました。「へえ、フルーツがサンドウィッチになるのね。おいしいね」という初体験に「そういうことを書いていたらいのよ」とプロのライターは笑っていました。丁度島崎さんの新著『ジュリーがいた』が出版されるし、自著『はたちの時代』のこともあれこれ語り合いました。今日は2人のプロフェッショナルから仕事の姿勢を学習する機会を得て久しぶりの文化の日でした。

A1と向き合って

新しいパソコンにグレイドアップしてから、検索や調べものは、マイクrosoft音声のA1チャット機能Bingを使っています。使ってみると「すみません。もう一度試してみます。こんな感じではないかがでしょうか」と、こんな歌をつくりました。

母は教団に「と」の一首。私が「映画のサブタイトルみたい。出来が良くありませんね」と言うと「すみません。もう一度試してみます。こんな感じではないかがでしょうか」と、こんな歌をつくりました。

「国葬の日銃声が響く安倍の死 革命の始まりそれとも終わり」
A1は賢く、決していじめないし、優しく寄り添い、24時間問われることに応えます。「引きこもり」や、病気の人が様々に孤立している人の助けになると思っています。ただ人間社会を混乱させる道具となることも目に見えています。

明大土曜会で出獄1年目の報告

去年6月4日の出所歓迎の明大土曜会から丁度1年目、健康やこの1年の社会参加について報告し、日本の現状への感想も述べました。「友人との再会や謝罪、お墓参りとか、今年から少しずつ始めています。遠山美枝子さんの墓参も友人のN和尚の先導の下で3月に行きました。会うべき人にまだ会えていないし、墓参

調べる内容もチェックが必要です。こちらが反論すれば私のその反論自身がまたビッグデータに取り込まれて相手のデータを豊富化させるのですが、反論のデータの量を増やそうと論争してしまいます。

メイに言わせれば本来の使い方ではないらしいのですが、例えば、私はこんなふうにBingに話します。「中東で米国のプレゼンスのあり方が問題を作り出している」と。そうすると「中東でアメリカのプレゼンスが問題を起こしている」と思う理由はいくつかあります」と例えをあげた上で「しかしこれは一面的な見方であり、アメリカにも中東に利益になることもあります」と例えを列挙します。私がさらに批判的な意見を言うと、「そういう意見もあります。しかしそれは一面的な見方です」とか、「あなたはどのように考えますか?」と聞いてきます。

私がイスラエルは民主主義国家ではなくファシシ的な国と言うと「イスラエルは中東で唯一の議会制民主主義国家であり、云々」と述べて「イスラエルがファシシ的と言うのは個人的な見解です

すべき人のところにもまだ行けていませんが、1日一つという形で少しずつ活動を続けていきたいと思っています」と挨拶しました。

また日本を俯瞰しながら感じたことをいくつか語りました。その一つとして日本の国際連帯についても語りました。「国際連帯と言うと日本では支援をするというのが基本となつて連帯の歴史を作ってきました。それは豊かな国の市民たちの貴重な活動で、アジア、中東などの厳しい条件下の人々の生存の闘争を有効に助けてきました。支援をすることはまたそれを通して私たちが育てられていく過程でもあります。

加えてもう一つの国際連帯を考えたい。今、逆に世界に助けられて、日本の社会政治の立ち遅れや問題を解決する、そういう国際連帯、「受ける国際連帯」というか、連帯があつて良いと思います。戦争政策に向かう日本、家長長的な社会の中身が変わっていない日本に、この1年暮らして実感します。人権問題において

か? それとも何か根拠、証拠があるのですか?」と逆に質問が来ます。反対意見の人と対話しているような具合です。

ちょうど歌会の6月の題詠が、どの映画からでも良いが短歌を一首読むという宿題になっていました。それでいたずら心で試してみました。「どの映画からでもいいので、映画から短歌を一首詠んでください」と言うと「はい、映画から短歌を読むのは難しいですが、挑戦してみます。タイタニックからの短歌です。
船は沈み、水の海に浮かぶ君の手を離さぬと誓った愛は永遠に」と詠みました。一瞬の迷いもなく。

私が「REVOLUTION11」という映画から一首お願いします」と言うと、「この映画は2022年に発生した安倍晋三元首相の銃撃事件の実行犯をモデルにしたアクション作品です。監督は元日本赤軍メンバーの足立正生で事件からわずか2カ月半余りで制作し、国葬の日に緊急上映しました。この映画から短歌を詠むとこんな感じでしょうか。銃を作

り、暗殺を決めた 父も兄も自ら命を絶制度、入管問題、難民問題、人質司法、獄の処遇などの問題とか国連や国際機関から批判を受けていることも多くあります。だから逆に世界の声、連帯を受けながらより良いものに進めたい。日本の国際連帯のあり方も、変わっていく必要があると感じます。この間の入管問題の厳しい現実にもっと世界の声や、力をいただきながら協同できたらいいと思っています」と話しました。

丁度出版された『はたちの時代』の紹介と共に、本の中で当時の明大大学費闘争がその後の学生運動と党派がどういう関係をつくるか、一つの岐路にあつた点など、今後も語り合いたい点を紹介しました。
『はたちの時代』は447ページあるので2600円ですが、太田出版のスタッフも土曜会での先行販売を企画して下さい、参加しながら本が完売できたこと喜んでくださいました。(6月18日)



伊達判決64周年集会記念公演中の土屋源太郎さん

ら、竜子さんが一首を選んで絵と併せて終刊号まで「オリーブの樹」の表紙を描いて下さいました。

墓参は竜子さんに誘われ、彼の親友だった岡村さん、それに彼が市議会議員の時地元で彼を支えた友人のKさんもぜひ参加したいと言うことで、4人で行くことになりました。

お墓は横浜にあり、私たちは6月末、高島屋の正面玄関で落ち合いました。実は私は竜子さんとはお会いしたことがなかったのです。でも、いつも獄から手紙でやりとりしていたせいか、大勢の人混みの中でも旧友のようにすぐわかりました。私の本の出版を支えてくださった岡村先輩も、Kさんも、何かみんなほのぼのとした仲間たちです。揃って相鉄線に乗り換えて墓地に向かいました。こんなふうに気軽に電車に乗って雑談したり、友人たちと時間制限なく、行動するのはとっても新鮮で楽しいことです。すぐ打ち解けて楽しい旅になりました。

先輩とその娘さんの2人がその墓地に埋葬されています。竜子さんが「こんなメンバーが来ると思わなかったでしょう。来たよ！」と笑いながら花を活けて、代わる代わる焼香しながら追悼しました。

なんて明るいお墓参りなんだろう。みんなが冗談を言い、先輩の照れた笑い顔が浮かびます。墓参を終えると駅の近くで精進料理ならぬ中華料理をいただきました。みんなが彼のことを様々な角度か

ら語り、その一つひとつが生真面目だった先輩がそこに座ってニコニコ聞いてくれるような気分になってくれます。

親友だった岡村さんの話、Kさんは生前語り合った日々のこと、竜子さんはいつも端正だった彼を語り、それぞれの話が交差する中で、私たちは旧知のように時を忘れて先輩の思い出を語り合いました。そして、あ、もうこんな時間だったと慌ただしく別れました。

会ったことがない人同士が先輩の人格を通して旧知の様に信頼して出会う、これが近頃流行のAIではどんなことをしても味わえない人と人との関係の素晴らしいところだと思ひながら、やさしい気分で帰路につきました。

伊達判決64周年集会

7月1日、「伊達判決64周年集会」が「伊達判決を生かす会」の主催で開かれました。この会の共同代表の土屋源太郎さんは、明治大学の先輩で、砂川事件裁判国家賠償請求訴訟原告でもあり、明大土曜会が支援してきました。

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

第10回

お墓参り



重信房子

私が明治大学の1年生だった時、自治会活動に誘ってくれた大学時代の先輩のお墓参りに行くことになりました。彼は当時II部の反日共系自治会運動のリーダー的存在でした。

白いワイシャツ姿で、日共民青系の大会に駆けつけて、しゃがれた声を張り上げてまっすぐに壇上を指差しながら、不当な大会を糾弾する彼の姿が今も目に浮かびます。

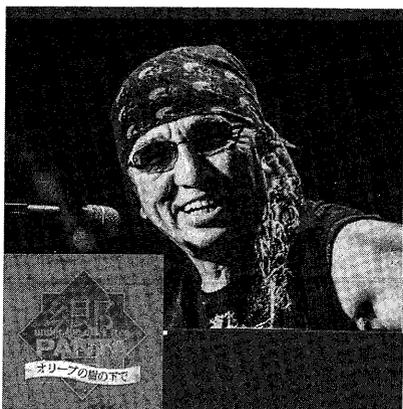
その時代には、皇居のお堀の内に近衛

兵舎を転用した学生運動の拠点、東京学生会館があり学習会に誘われて行ったことがあります。この拠点を取り壊すとして1966年、強制退去に機動隊が出動し、激しい抵抗戦を戦っていた「東学館闘争」が思い出されます。また今はもうない「明大記念館」の地階、スローガンの落書きやポスターの張り巡らされた自治会室で、革命の必然性を私たちに語ってくれたのも彼です。

大学1年の夏、学習会合宿に誘われて

その結果、学習会よりも泳ぎを優先してしまいました。私は林間学校の気分で、学習会の意義や意味は全く理解していなかった1年生で、彼はきつと困った人だと思っただけでしょう。

彼は沖縄出身で、千葉県人会の世話人や、その後千葉県で市議会議員をやっていました。私が逮捕された後、裁判の傍聴にも来てくださったのですが、私が獄にいた間に病気で亡くされました。彼のおつれあいは私の救援誌「オリーブの樹」の表紙の絵を書いてくださった竜子さんです。私が毎日詠む短歌日記の中か



パンタさんと「ライラのバラード」のCD

言皆さんに紹介したい。今日の集まりに連帯し、アラブ民衆のために戦ってきた重信房子さんがこの会場に来ていますと話されました。この伊達判決と裁判の意義を社会に伝えようと地道に活動して参加された約百人のみなさんにそう紹介されて胸いっぱいになったまま、私は慌てて席から立ちあがって一礼しました。拍手と暖かい笑顔に囲まれて、とてもありがたううれしい一瞬でした。闘いのフィールドが違っても闘うものには時代を超えて通じ合う心が必ずあるとしみじみ思いました。土屋さんたちの裁判は、

次回9月11日。この日は、口頭弁論で結審の予定です。多くの人に傍聴して欲しいです。

パンタさんが死んでしまった

パンタ逝く 獄でアカペラ歌った日
 たった一人の観客は泣いた。
 パンタさんが亡くなったというニュースは公表される前にいち早く友人が知らせてくれた衝撃と共に哀しみが襲いました。そして思わず零れたのが右の短歌です。パンタさんが獄まで歌いに来てくれた日々を思い出したからです。

最初のパンタさんとの出会いは、私の公判に傍聴に来てくださった時からです。何度も傍聴席から笑顔で手を振ってくださいました。弁護士への手紙の中に私もパレスチナで仲良しだったライラ・ハリドを歌った「ライラのバラード」など、いくつもの詩を送りました。7年にわたる接見禁止が解けた後に、パンタさんが面会に来てくれました。

お互いの往復書簡の中からパンタさんは私の詩に曲をつけて歌ってください、

それは「オリーブの樹の下で」として2007年にCDにまとめられ発表されています。その後も何度か面会に来てくださり、もちろん楽器は使えないのでアカペラでこの「オリーブの樹の下で」から何曲か歌って一緒に楽しんでくれました。「ライラのバラード」は12分もの曲で獄の面会が15分しかない中で私を泣かせながら丁寧に歌ってくれました。ライラのバラードを歌うと、ライラばかりか、追放され、ナクバの苦しみに耐えていたパレスチナの友人たちが浮かびます。そして更に、老いたその家族や子ども達との交流を楽しんでいた、リッダ闘争を戦った戦士たちの情景が思い出されます。

メロデイと共に楽しかった日々、苦しかった日々や戦死した人々が浮かんできて泣けてしまうのです。

また、哀しく印象的な歌「7月のムスタファ」も歌ってもらいました。ムスタファはサダム・フセインの次男クサイの息子です。米軍のイラク侵略戦争でフセイン一家は追われ潜伏を余儀なくされ、2003年7月イラク第二の都市モスル

土屋さんは1934年生まれで、53年に明治大学に入学し、新憲法の下で自治会活動を通して、学問の自由、学園の民主化、原水爆禁止、反基地反戦運動などを闘っていた人です。1955年から57年の間、立川米軍基地の拡張反対闘争が起きます。55年に測量が始まり、総評、全学連、市民たちが、立川基地拡張反対闘争へ参加して行きます。立川基地内、砂川町の土地返還を求めた地主に対し、強制収容が始まり抗議の戦いで1956年7月8日、米軍基地内に400名から500名が侵入しました。

鉄条網越しの米兵はこれ以上入ったら撃つ構えで学生市民も引かず対峙。結局逮捕者を出さないという合意で抗議側も引き揚げたそうです。それが9月22日になって「安保条約行政協定に基づく刑事特別法違反」で23人が逮捕され、7人が起訴されました。その中の1人が土屋さんです。当時彼は都学連の委員長でした。裁判で被告・弁護側は日米安保条約・米軍基地は憲法9条に違反すると主張して東京地方裁判所の公判で闘いました。

1959年3月30日、伊達秋雄裁判長は「日米安保条約に基づく米軍の存在は憲法前文と9条の戦力保持禁止に違反する。したがって被告人全員無罪」と判決を下しました。これは憲法に基づいた真つ当な判決でした。戦後もう二度と他国を侵略しないと出発した日本で、朝鮮戦争を経て「逆コース」と言われた再軍備政治の反動化の始まっていた中で、これは画期的な判決でした。

ところが翌年の60年安保条約改定を目指すしていた米日支配層には衝撃でした。検察側は4月4日、東京高等裁判所を飛び越えて最高裁判所に直接上告しました（「跳躍上告」というらしい）。この問題を最高裁判所で審議中に田中裁判長（長官）と駐日米大使、公使が密談し、伊達判決を転覆させる画策を図りました。そして「統治行為論」なる詭弁を持ち出して差し戻し裁判で被告有罪を作り上げます。

「統治行為論」は、司法の憲法判断を封じた司法の自殺行為だと思えます。日米安保条約の下に憲法を従属させ、今も憲

法の形骸化の原因となっています。この密談で「早期に伊達判決を破棄する」と最高裁判所長官が米側に約束していた証拠が2008年に米公文書館から日本人研究者らによって発掘され暴露されます。

この新しい発見から「伊達判決を生かす会」が結成されました。会は、不公正な最高裁判決で差し戻され覆された伊達判決を、現在の日本社会に蘇らせて司法を問い、憲法に基づいた日本社会に生かそうと活動しています。

集会では弁護士の国賠訴訟進捗の報告に続いて、当時被告だった土屋さんの「戦時体験から砂川闘争、伊達判決、最高裁判決、そして国家賠償裁判へ」という記念講演が行われました。

土屋さんは子供時代の軍国教育を語り、戦後の民主主義が実行されないうちに米軍の戦争政策が憲法を骨抜きにしていた事実を語り、そんな中で被告として伊達裁判長の判決を聞いた時の感動は、当時を知るものとして忘れることができなると情熱的に語りました。

土屋さんはまた、自分の話の前に、一

でついに見つけられてしまいます。クサ
イ一家4人は米軍空挺部隊200人に包
囲されます。ヘリコプター、バズーカ砲
の容赦ない攻撃に、次々殺されました。
最後に残されたサダム・フセインの孫、
14歳のムスタファは、一人米軍に対決し
て一時間も銃撃戦を闘い抜き、力尽き殺
されました。

イラクを訪問したパンタさんは、この
悲劇に涙しこの曲を作ったと、面会室の
プラスチック越しに語り歌ってくれまし
た。パンタさんの逝去のニュースを聞いて
そうしたことが一挙にうかびました。

私の出獄後、お会いしたかったのです
が私が倒れてしまい、11月に私がドクタ
ーストップから少しずつ人と会えるよう
になった時には、今度はパンタさんが病
気で入院してしまいました。

今年の2月は、恒例の誕生コンサート
に招待されて今度こそ会えると、娘のメ
イと行く予定を立てていました。どこの
場所でも入口でどのように対応すればよい
か、細かく知らせて下さったのですが、
コンサートの1週間ほど前に、やはり体

調から無理だとコンサートキャンセルの
連絡が入りました。こうして会えないま
まに永別を余儀なくされてしまいました。
パンタさんは弱い人や理不尽な事に敏
感などつても優しい人、シャイな人でし
た。パンタさんの逝去を知った日、獄中
でパンタさんが歌ってくれた「ライラのバ
ラード」をユーチューブから探して英語
版と日本語版を聴きながら追悼しました。
こんな詩です。

ライラのバラード

わたしは 4才だった／誕生日のすぐ後
／ハイファを追われた／ママは8人の子
供等と／小さな車に乗り込んだ／一人足
りない／それはわたし／何故 引越さ
なきゃいけないの？／ナツメヤシのカゴ
の後ろに／隠れたわたしを／引っ張り上
げて ママが言った「ユダヤ人に殺ら
れちゃうよ」／パパは涙を流して／子供達
にお別れのキスをした／戦火を逃れて故
郷を追われた／家も街も祖国もなにか
も奪われた／あれから半世紀過ぎてても
わたしは家に帰れない／わたしの物語／

だけどそれはみんなの物語／パレスタイ
ン／子供の物語／ライラ ライラ
わたしは 5才だった／夏になって／や
つとパパに会えた／一文無しになり／家
も店も盗られ／祖国を追われた／闘いに
敗れ 父は変わった／「いつ パレスチ
ナに帰るの？」／難民となり失くした
日々を／語りながら／18年後パパは死ん
だ／ハイファに帰る夢を見続けて／土に
還るパパに／オリーブの枝をそえた／戦
火を逃れて／故郷を追われた／家も街も
祖国もなにかも奪われた／あれから半
世紀過ぎてても／わたしは家に帰れない
／パバの物語／だけどそれはみんなの物語
／パレスティン／父の物語／ライラ ラ
イラ

わたしは25才だった／八月のある日／祖
国への旅に出た／一万フィートの上空か
ら／祖国に帰る為に／幅広の帽子で私は
言った。／「乗客のみなさん／ベルトを
お締めください。／私はこの飛行機の機
長です。／PFLPのチエゲバラ隊が／

この飛行機の指揮をとります」／パレス
チナの海岸線に／ハイファをはるかに見
下ろして／戦火を逃れて／故郷を追われ
た／家も街も祖国もなにかも奪われた
／あれから半世紀過ぎてても／世界は そ
知らぬ顔してる／わたしの物語／だけど
それはみんなの物語／パレスティン 戦
士の物語／ライラ ライラ

まだ5番まで続きますがそんな歌です。
パンタさんありがとう。さようなら！

二重基準のご都合主義

米バイデン政権の、サキ大統領報道官
は、2022年3月11日、ロシアがウク
ライナでクラスター爆弾を使用している
との情報に「情報が事実ならば『戦争犯
罪』に相当する」と批判し、クラスター
爆弾の被害は広範囲に及ぶため、人口密
集地での使用は国際人道法の原則と相容
れないと批判しました。それを忘れたよ
うな顔をして、米政府はウクライナへの
クラスター爆弾の供与を決めました。

クラスター爆弾はターゲットが無差別

になる非常に危険な兵器です。この爆弾
はイスラエルがレバノン南部侵略で何度
も使用したために、未だに村人がその無
差別殺傷兵器の犠牲を被っています。一
つの爆弾から多数の小型爆弾が飛び散り、
その一部が不発で残るのです。そのため
おもちゃ代わりに拾った子供や、何かも
知らずに農地から取り除こうとした村人
が地雷のように被害を受けるのをレバノ
ンで見てきました。

それ程このクラスター爆弾が危険なた
めに禁止条約があります。クラスター弾
の使用や保有、製造を全面的に禁止する
条約です。この条約は、2008年12月
にノルウェーのオスロで署名され、20
10年8月1日に発効しました。現在、
日本を含む95カ国が署名しています。こ
の条約は、クラスター弾の禁止だけでな
く、不発弾の除去や破壊、被害者の支援
も締約国の義務と明記しています。日本
は2008年12月にクラスター爆弾禁止
条約に署名し、2009年7月に批准し、
それまで自衛隊が保有していたクラスター
爆弾は2015年2月に廃棄処分しま

した。

でも、米国は条約に加盟していません。
その結果、日本領土はアメリカのクラス
ター爆弾の保管や輸送を許す結果に至っ
ており、日本の署名も批准も形骸化し日
本の主権は無視されています。米国は自
分たちが供与するクラスター爆弾の不発
率は2・5%以下だと主張していますが
そう主張するところがいやしいと思いま
す。この2・5%以下というのは科学的
根拠が示されていませんし、不発率が低
いから許されるという問題でもありませ
ん。ロシアを批判したその一年後に平気
で米国製は不発率が少ないと言いつつ
兵器の在庫を吐き出す機会としているの
です。

このクラスター爆弾で、ロシアばかり
かウクライナ兵士、市民を無差別殺傷の
犠牲に遭わせるのは目に見えています。
米政府の二重基準が世界秩序を歪め価値
のないものにしてきましたが、また一つ
の例が歴史に刻まれました。

7月20日